一七

東谷平嶽之印

東遊記後編目録

一之巻

○壷れ石婦夫

○安積沼

○盲暦

○葡萄嶺雪ニ歩ス

南長岡平野屋三裏印

二之巻

○龍燈

○三馬屋

○駿河の名

○新潟

○狐の義理

○三本木壱

○掃木
○蚌珠
○龍鱗
○養軒の詩

三之巻

○四五六谷
○北極星
○黄鐘調
○善光寺
○諏訪湖
○齋藤五郎兵衛
○登龍
○箒木
○霧島の慈悲

四之巻

○熊野御前
○松嶋
○羽州鬼
○舞樂

○漢文帝　○戸隠山
○大魚　○塔影

五之巻

○手取川風雷　○床下の夢
○飛根城跡　○舎利濵
○洞山　○廣徳寺門
○氣候　○名山論
○徴先　○地氣

東遊記後編目録畢

東遊記後編巻之一

壺の石碑

南谿子著

名高き壺の石ぶみは奥州仙台の東北多賀城の古跡にあり即仙台より松島へ至る道筋にして街道より纔に町四拾間入り込所なり南都の墨屋松井某享保中此石ぶみの石を立てたる事明白なり往昔蝦夷王化に服せず奥州も大半は其種類の有りして猶そこらにも多く住ひ居りし故京都より將軍遣されて是を鎮めらるる事ありて鎮守将軍といひて居玉ふを鎮守府といふは多賀城四達の地にして此府あり天平寶字六年大野東人といへる人多賀城を修理し此石碑

蝦夷四方の路程を記し見雲真人これを書しむ今に至つて
八千年に余る古物なれども字体至て古雅にして広沢が換鵞
百譚にも称美し置り多賀城修理後数百年を経て秀衡鎮
守将軍たりし頃まで平泉に居住して此城ハ廃し壺碑を
去つて鎌倉殿の乱に云ふまでもなし後ハ名のミはまる迄なり
今世伊達政宗より三代目吉村中将の時此壺碑を尋ねて
られしに今の碑ハ土中より掘出されしと云れ給の時とかや
なれども此今千年の後までも文字も明白にて
石おしゝと換ぜしして人々是見る事誠に不思議の事なり
之碑の体自然石にて文字を彫る方計平にて見つきなり

るゝ又六尺厚サ一尺三尺基石なし外に小堂ありて是を覆へり
四方を格子にして人のこれに撫てうち石をかし損ることを患く
古き碑なることの中にもかゝる碑の事ハ世上の人普く
知る所なれば委しくいはず又或人のいひし壺ハ
所と讀字にてあるべし音掴にて街中の碑ハ壺碑と
云と爾雅の注にあるよしにて云ハおもしろし又東の壺碑と
いふものあり是ハ此所より七八十里計東北の方南部
の野辺地の近在に壺村といふにあり其村に壺山といふ
山ありて其山に石碑あり村民是を碑明神と崇敬し社を建て
是を祭り氏神として往古よりかゝる小聞く事なし

碑面文字あり上ノ方に大字に東といふ字を彫付たりと云
此文ハいかなる事にやあらん土民尊敬して石摺などにする事
をゆるされ故に志ある人なしを年好事の士此碑を摺り傳へん
てもくと難きもじとも極まる方の事なれば知る人も稀にていまだ世に
弘まらず今も彼地往來せしかども是を遠望識の
ほ佐頼なりしかバ取も敢ず立寄しが最村人もいひて今す
今ふ称る處あり多賀城の碑黒西と云大字あるハ是に對する
東の碑なるべきといへり文技木条清捕鎮臣の前にあるにやは
古跡のおちにあるときこえたる世の中城といひしところなれば文
西行の山家集にみちのくハ奥ゆかしくもあるよりゆる壺の

ゑみしかの遺風などゝおもへバ是等も東の壷碑 なりとゝむる
し

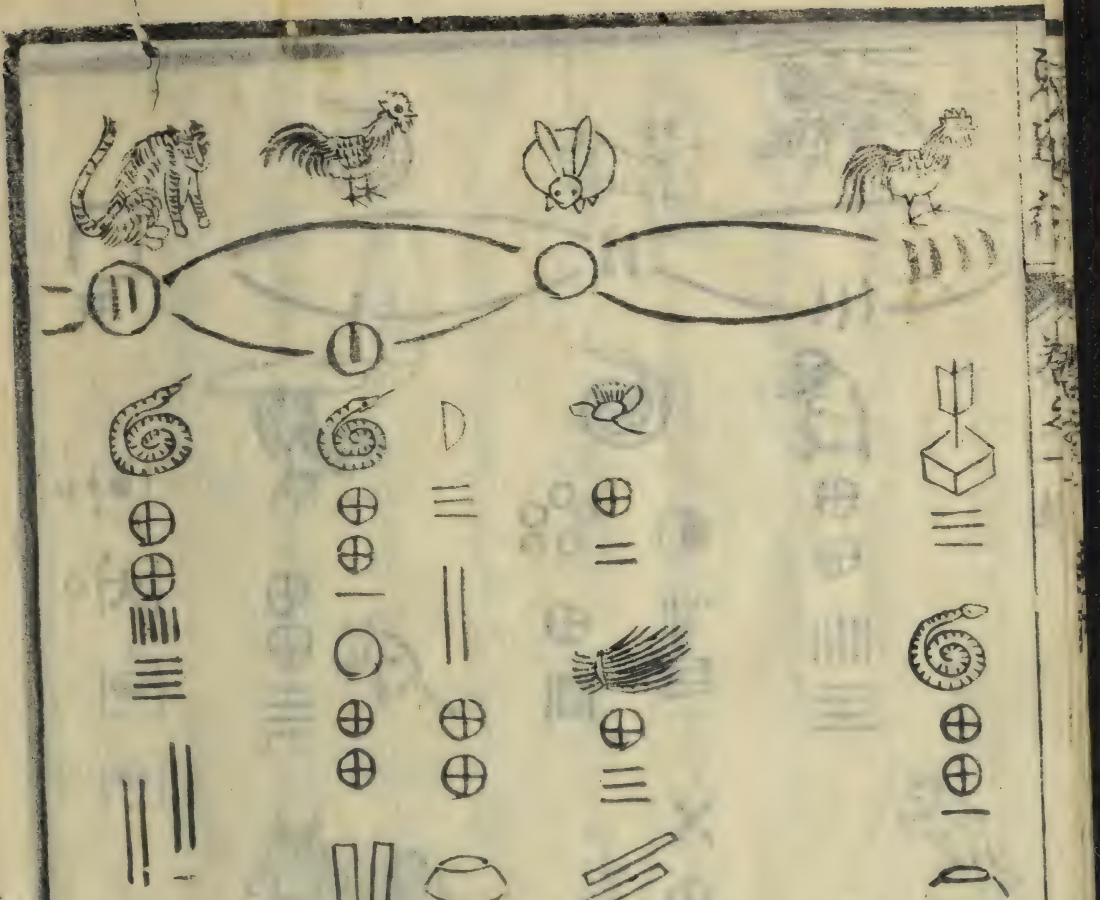
盡語

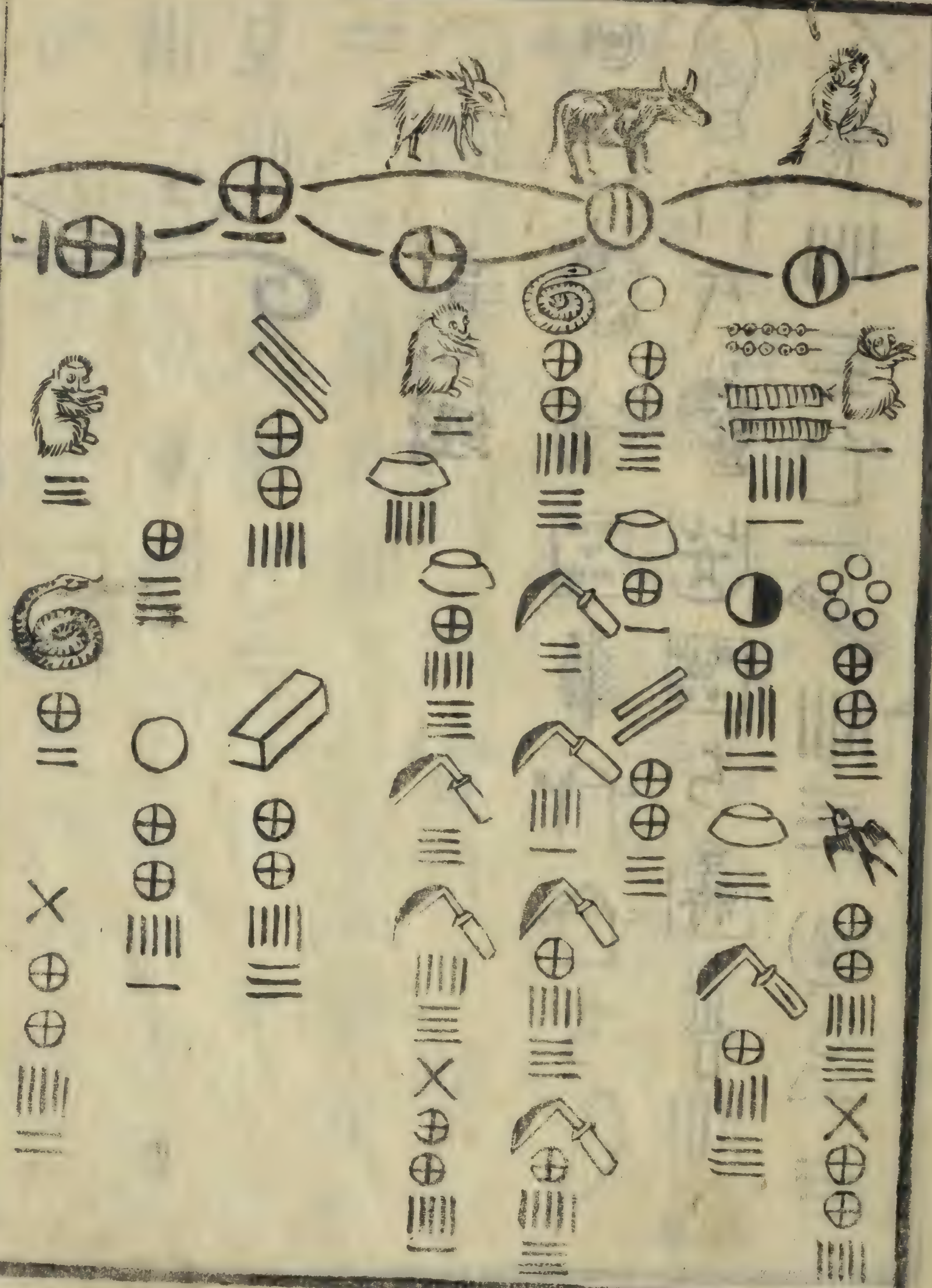
天地開闢よりこのかた今の時ほど太平なる事ハあらじ
西ハ鬼界屋玖の嶋より東ハ奥州の外が濱まで号令の行
届ざる所なし往古ハ屋玖の嶋ハ屋玖國とて異国のやうに
申され奥州もむかしハ蝦夷人の領地なりしかバ猶今にいたりて夷
人の住所ありしと見えて南部津軽邊の地名なとハ蛮夷言多し
外が濱通りの村の名などもタツピ ホロヅキ 内マツペ 外マツペ イマ
ベツ ウテツ なといへる所あり又田名部の北方にもヨコペ ラシこし
リヤ などいへる村々在りてその名多くハ此類 是皆蝦夷詞也 今

ゆてもウテツすくの道ハ風俗もせく蝦夷に類して津輕の
人を流罪ハヱゾ種といひていやしむること余おもふにウテツ道
に混じて南部津輕道の村民もありてハヱゾ種なるべし只早く
王化に服して風俗言語を改むる所も先祖より日本人の
ごとくなりひさしく居る事なれどもなる故に禮義文華のいまだ
開けざるハ元の事ゆゑ南部の邊鄙にハいろはをもしらず
して盲暦といふものありて余が通行せし街道にハ
あまた有れどもいとまなくてさらになく又般若心経をもとめめく
暦の法まで調をもとめて云ふ圖たのもし

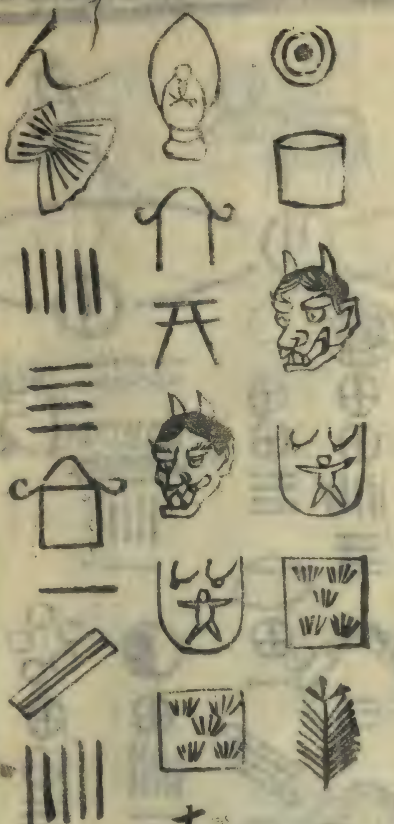
盲暦

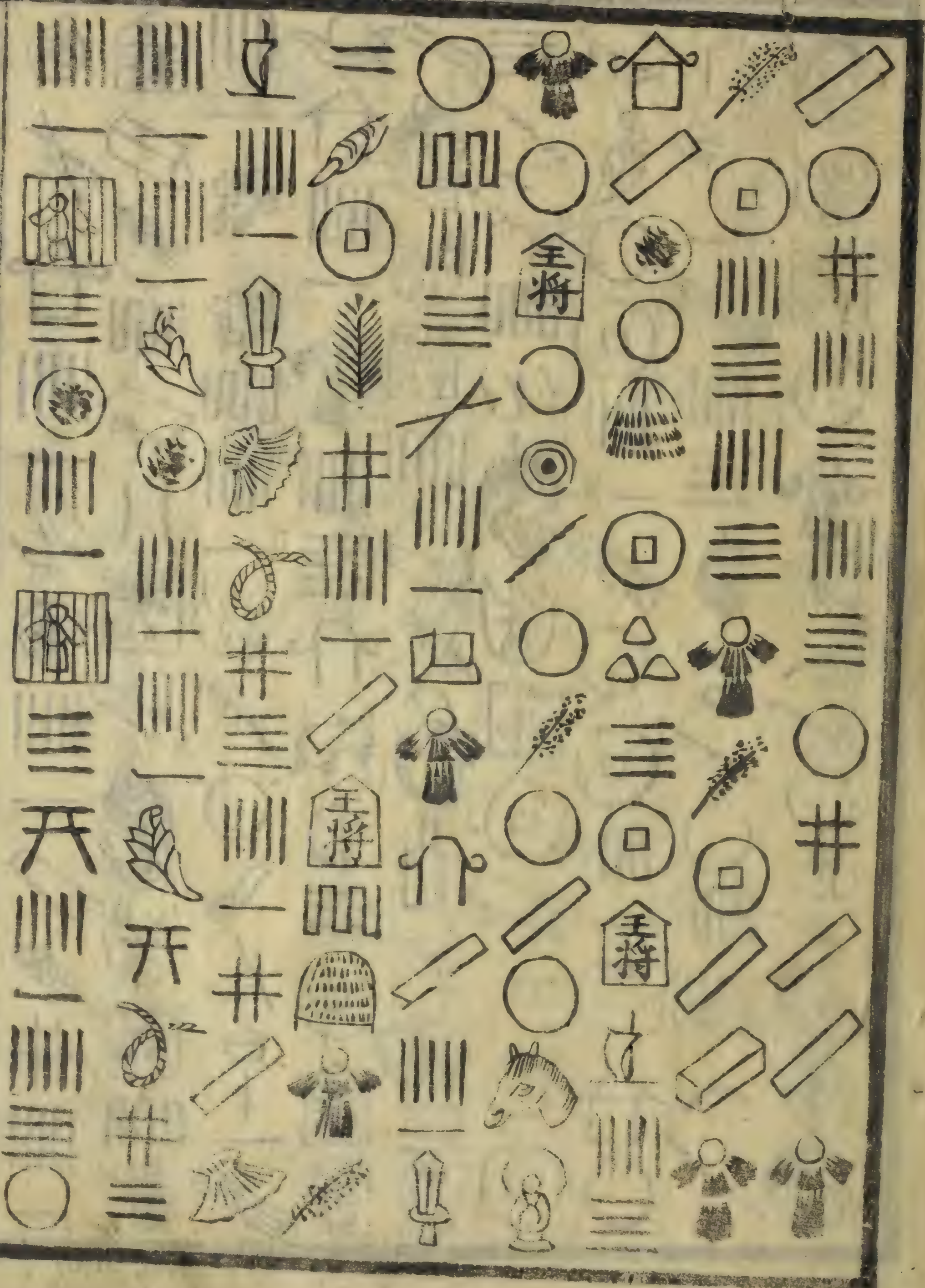
开
大

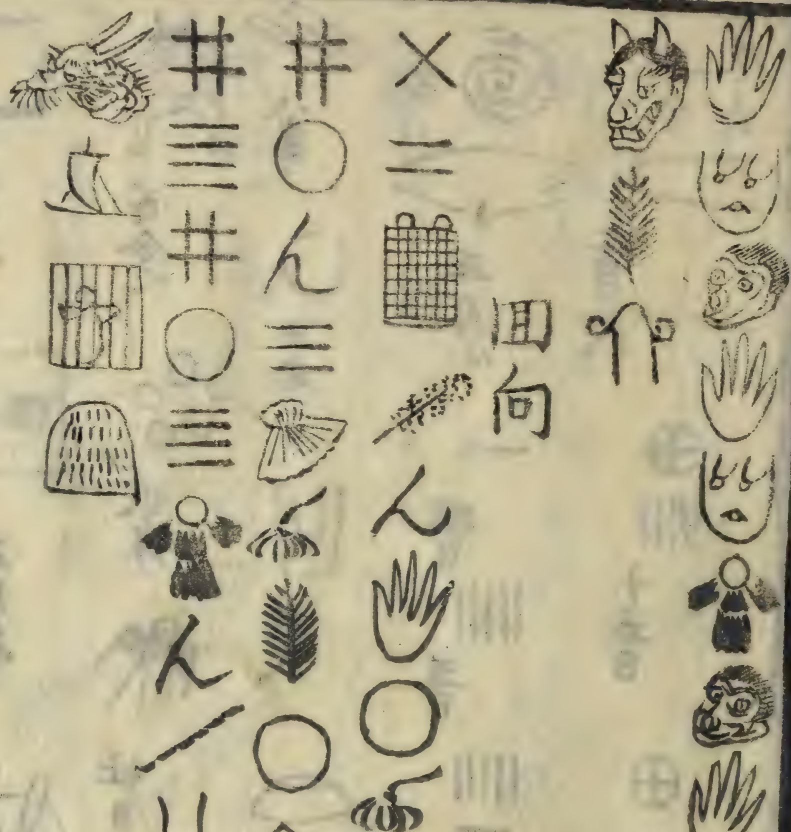




盲心經（メクラシンキヤウ）

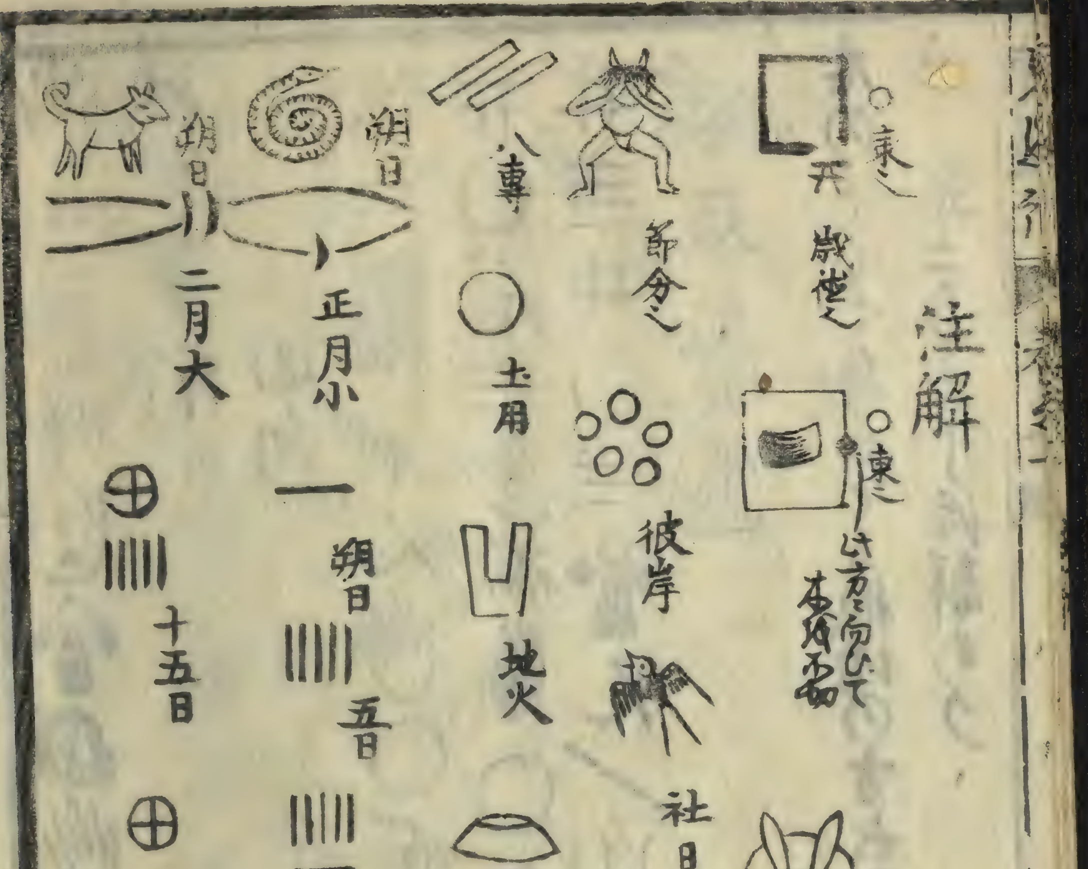






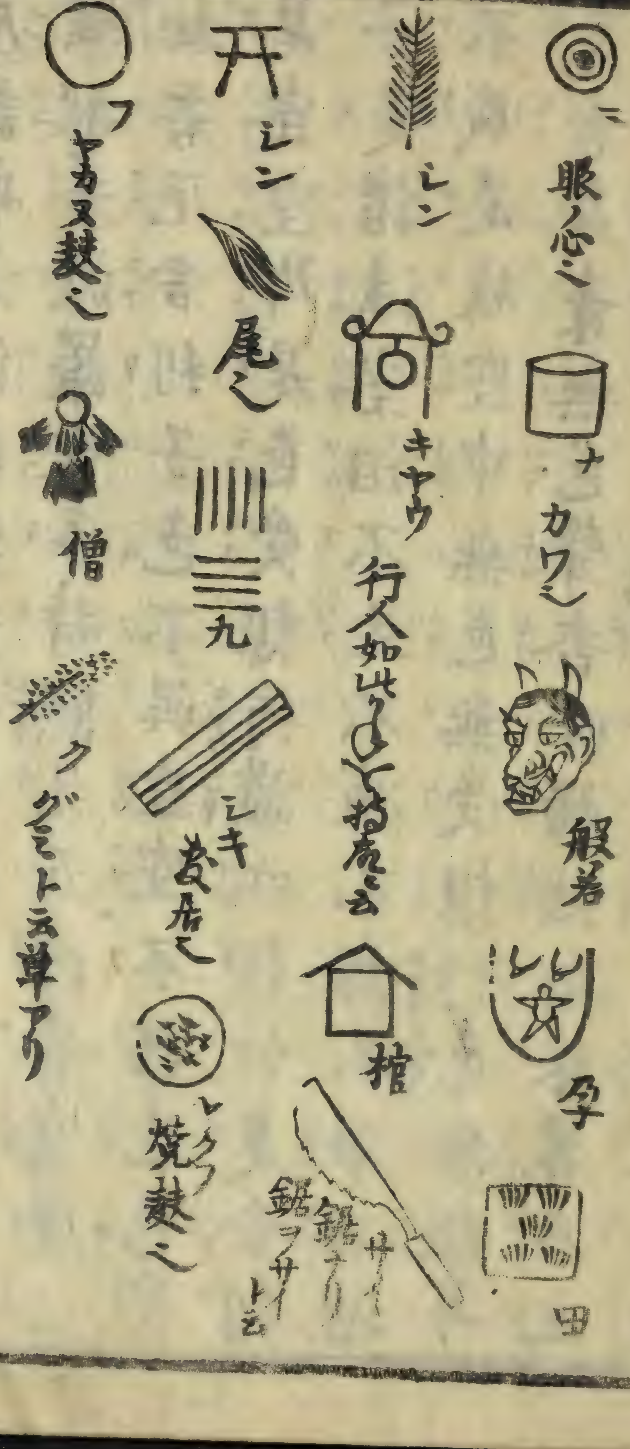
右のごとく絵をもとる彼地の方言あり其意を尋ぬるにいかにも合
点し難きことなりし注解あり

注解



○東之
歳徳之
○東之
此方ニ向ひて
八専
節分之
彼岸
社日
庚申
八十八夜
とし
土用
地火
種まきヨし
朔日
正月小
朔日
二月大
一
朔日
五日
九日
十日
十五日
二十日

心經注解



ニ 眼ノ心ニ
ナ カワ之
般若
孕
キヤウ
行人如此ク
レン
开
レン
尾之
九
ニキ
レクウ
フ
ヤカヌ鼓之
僧
ク
クゞミトニ云草アリ
鋸
鋸ナリ
サイ
鋸ヲサイト云

心經原文

摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老

死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得
以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多
故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一
切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若
波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故
知般若波羅蜜多是大神咒大明咒是無
等等咒能除一切苦真實不虚故說般若
波羅蜜多咒即說咒曰
羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩

婆訶

般若心經

右心経の本文に引合せて読むべし是等の書此用ひて假
名文字ともいはまほしけれど南部盛岡の城下より七
八十里を北西にあたりて田山村といへる村の山中の邊鄙
なる里識に古の結縄の約ともいふべし蝦夷地にも是らの
文字多く木に刻み付くる所ありとぞ是等の
るもてしるべし異國にもあしく東國との文華の發するもの
太古九州の山中いろは假名いはざる志らぬ所のあり

時も沼垂湊寺山の二首ともにみえて古風とはしりがたく
ざる事を知べし兎角日本ハ西より開けしとみゆ

菊蔔嶺雪ニ歩ス

天明丙午正月十八日余越後國平林といふ所に泊る西里翁
折しも雪降ル事かぎりなし余まで村上の城下にいたり同所の旧友
をとしより馬に乗らんとせしに足ハ雪深くして道なし
雑しといへども城中までハ三月末の事なれバいまだ雪ある
ありけるをさるにてまうでの道ぞこれ稿のごとくなりしが見たる
不自由なる所かくハいふなるべしと疑ひけるがせんかたなく
聊く家を出て村上よりも黒猟沢の驛の邊迄既に

ふくしまより又吉里塩の町といふ驛にて中食するに宿の
高遠のほうより見えるなる先ハ雪深くしてたるすくなく
わらさし今宵ハ此所に宿りあくれバ早朝より出立して
くいまだ日中にも過ぬるに宿をもとめて此老婆の此家に
あひとるのこいふるべし晴れて天気も暖くなり此先の前途の
驛とハ幾ほど里の道なれバ八ツ比ハ白川を越て行べしと
あまたひとにおもふ儀に老婆がいへるハ塩の町の出離
もとより雪深く山川道路四面の雪にて村離も
東道計りハ人の行通もなくあつて国中まるでうしろ
けるはず先きハ左方角にて見えずとて行く

こゝきんと見ゆる峯ハ遥ひなれハ雪と晴めさて川の面へ
落入り滝けるも雲の中にあり或ハ切岸なとの所よりかゝら
雪霜も落して深き淵へ流込なとして岩に添て動け
合ふて岩窟の手前なる所に落なとへしと見ゆる浴に谷川
池澤よりけ田なとの中へ落入りて西側の車にて千石ほどに及
へたそれにとなき桜雪をはき添けるば川のことくにて溝
全て落入る事なりしかくなる事男女の浴の湯と
出月かしこ日暮に至りてやうやく葡萄の紫を出と見ゆ
後る老婆の羽に従ひ塩の町に一宿す苦ねの西風さ
うちに宿内共に代中にひいて来るゆえのかくれ居るのへ近

ましく瘧海しながら光悪寒して付しと脚の湯とは
乏ひ脚に及くより疫気と風くに足より血の滞りて起
とんくハ今月度て諸のさと滲入りし時疵付けるしが二三日
ハ血を濾てりしらべ痛こども覚えずなりしに今腹に入り
火人にあるあるく神く血の出るなりし其の腹今悪
くおさまり母は夜はりして子に今日のおぞらにかくのごとし
ならの道をまつにおいて嫗とり侍りて此比世一の霊やかれし
がいかなる難儀に及ぶとん只早天雲霧さかくさる不思議
者はやとひ賊さべしと申しく十次すぐ防ぎて
けるもの立にも安否を先に立道ていそぐ道に吹くにも勝り

て數丈の積雪山ハ白浪となりて谿をうづむごとく樹木も見えて深
けれども靈窟までハ八分をたどらしらず雪を泳ぐごとく
蕨谷の邑を過して猿が頂に至る式部の矢伏嶋
神として神祠あり此所より山の懐なる處にや雪の白く
すく曉く見ゆ神祠の後に岩穴あり此神の住居なるハ
なりといふ巖窟の上乃方に見ゆる隱壁ありて巖穴
高サ二三十丈餘あるといふ其巖の邊に古木の杉數十本
あるなか一本の杉の梢すくなく光の窓に在りて此を世に撒す唐
画とかへるごとく奇跡此れ有り寓ハ一志をからげ猿ら慶宴
氣緩にて少しありて中村中坂荒川小股小渦おの村く

松堂藤雅則寫

残るかたに薄雪(うすゆき)の中にもいと遠景(ゑんけい)にのどかなる日が
積(つと)もる雪をて行先(ゆくさき)いよく深く数丈(すじやう)に餘(あま)りけり村々に
て寒窮(かんきう)貧母ひとり行(ゆく)に愛(ひろ)らしきより高く文かしゆらく所(ところ)
踏(さ)めけく落入る年昨(さくじつ)日のどかし招尾(そ)国といふ所のおゐて
こたへたる際(とうげ)と野辺(のべ)に見ゆるなる所行高嶮阻(はなはだけんそ)にして不
入(い)きあやかし寒苦(かんく)の恐(おそ)しも何事の辞(ことば)と理(ことわり)をたなり
ふうふ雪にまどひて途(はうり)の谷底(たにそこ)へ落ね金出に出(で)さて
出(ある)ハしに体(てい)とよく寒苦(かんく)の人のあるみ悩(なやみ)こそあり
け雪おしかりふかきれバ喜び是証拠付(さく)て難(きやう)に
あらハ何事かあらんといひてさぞ通ひよするにいそへ

よるべの蔭とて由とおもしく妻の心にかなふ町はりもことひ
蔭なりし小雪に埋れたる木の梢へ蔭からきく出らるゝ
手足いづれを探るべからず、うちつけとかのいふことも覚えざれば
とゝを探りとぬけおしまで、楼下の谷数百仞の切岸なるべき
ぞうありしが、まづ文吉まで蔭たるなれば、しばし絶入りて登りゐしが
は探ちあついかゞせんとあがりきう力草に枝居たりし一本の
精ぢからぞおしゆるもやいがの文吉の上にさらべの蔭の中程より
は前の方遥拾に離れ蔭て洞く金の精に加りて居たる内に
虎助は早先に蔭りかゝれしを見つ蔭まりたる所迄も
幸ひにげがたし、されおし見つけぬきしは虎助と云れ

今ところの方様何さえ見るまゝ雲山頂のごとくにおほひかゝりて
今やまうでしの落て命うしなはんとおもへば恐ろしく
息をつきあへば又其逆様にをちてぞ落るに手向の谷底を
見るのごとくに落付けり谷底まではいよいよ其の山落かゝる
其うちに見ゆるはいはナダレの恐ろしく何よばれてさも見るもすく
のがましあんとこゝろあてに谷底より谷の底は谷川流れ
てありむ是の下に雲を隔て岩所の土稲光きらめきしづか
雪消路ぬきさ谷川へ落入らん事をおそれしきりにとぶらひ
もはやナダレの来らん事危ぶめればお後とりて見届
人ともにはげしくにぬり只をもにそしりて十方作てきたり

出て行く磨くへ出ッ川音をやて迄ぶかる先舎とならひしん
地しとを語し体しふけ和して衛三人一和と為り来ま美なりし
と悦びぬよりて程明く尾田といふ所ふ付く高低ある相分け付て
後あ人ハ各人顔とえんるにて色土のごとく也くて動陽もいまるゝ話
なかしれ御が今日のたやう此事中ぐ筆ふは書尽くしがたきふあ
らず合戦保てるハ是神天助といふべし誠ろ高田ては十文
ヒトらいふりあり又アワといふものあり是一年をへの換するものと
ろハといふて名なりしなば三四月の比ふあり一のハといふ
雪竟中降附ふ山上の木の積りる者忍ハ落ることとぞ
アワ脈とふかひ落ることふ流ひ西よりすりぞとて次第ふ大

に成り積雪に成れバ大山のごとくに成りて落る是になだれ
ものハ大木も根こぎに成り打砕ぬる時ハ人家と
とふにおよバず雪あるをみぢんに打砕かるゝ事崩れし
といふは春の末に成り地中より陽気あるに従ひ数丈積る
雪の下より融そめ付く山より千万と落るにハ縁ひに動る
されバ其辺の雪一同に崩れ落て川も谷も埋むるゆへ
るの響又ハ人声にてもなだれ落る事ありと是にいふ
るゝ旅人凍死となるのみならず数十丈の雪に埋まりて雪消て
すをも知る人なし此二ツハ北国の人の恐るゝところなれバ只富家
に中居るものも今日の気をひとつにひかるゝ時ぞしゆへんす

扨此駅宿の主に此先も雪なりやと問ふに此先に本の腰掘迄
川などいふ所殊に嶮阻にして雪も深しと云扨ハいかゞせん此
所嶮阻にして雪も又深しと云扨ハいかゞせんと此所より雪深き
ますぐ遠路をとんやすくとらひなしみて亭主に尋ぬるに
亭主が云ハ是より西北に岩川といふ所にあり是へ出ずる
間道あり是ハ海辺を通ふれば雪も少て少し近き
半升雪の中なり扨此蒲原ハ羽越の界にて山の名高き
雪中なりし四時ともに旅人の難儀なる所也此所蒲原
ともかく旅人あまた殺害し今も往来の人とゞこほる所也

東遊記後編巻之一

諸國奇談

東遊記

[illegible]編

一七

東遊記後編巻之二

龍燈　　　　南谿子著

越中新川郡に眼目山といふ寺あり眼目山と書てサツクワ山と唱へきたりけれハ知ら洞宗旨にて禅刹にして道元禅師の孫弟子大徹禅師の開基なりしに大徹禅師ハ山城飛騨の生れし村山神龍神助力して色々の奇特ありしよし今ニ至迄毎年七月十三日の夜ハ眼目山の庭の松の梢ニ燈火のぼる其火ハ立山の絶頂より飛来りまたハ海中より飛来り此松の梢にとゞまる是を山燈龍燈といふひとつハおすらの人を側年々の事にて世界龍燈とて海中より出

の都ありハあまたあれども此寺のごとく山燈龍燈を夜ふ来る
こと松乃梢ふ留るハ希有乃事なりや又越前の敦賀
常宮の庭にも龍燈の松とて例年正月元日の夜かゝ
る事あるとこのわたりの人ハ皆見る事なり

新潟

越後国新潟ハ信濃川と阿賀の川と落合て海へ入る所なり海
口近くの二三里乃所ハ川幅広き事壱里或ハ半里ばかり満々
として船の多く入り海のごとし岸より岸まで水ハ深々
湊といふなり千石弐千石の大船といへどもやすくまで
も自由に出入りを湊ふ川端まで八日和第一とていふ廻し

川幅の広さも天下無双ともいふべし此河は信濃川といふて
此川の水上ハ信州犀川筑摩川とて二ヶ所善光寺の辺より
既に東西ニ流れ天龍川程の大河なりしを是より新潟まてハ凡六
十里流れ来て其間大小の枝川へ流れ入るゆゑかくのことくの大河
と成なりされバ越後ハ地勢平坦なる土地ゆゑ流れ甚穏にして淀
河のながれのごとくなれバ泥土越して諸々に多く皆ニコ土出来
川の両岸も柔かにて崩入り次第ありて汚まさる水勢ゆるやかなる故
なれバ大小船の通ひもよく其水ハ常に黄色に濁れり余ハ一とせ三
条と云所より新潟まで十里の所は此信濃川の流を舟にて下りし
ゆゑ此川の体委く見及びたるに長岡の城下より此新潟まで十

六里にて四百石積程の川舟常に一日二日に上下をなし運漕に便
利よろしき事此國又かゝる川すぐれたる事日本第一な
るべしこれを用ひざるは北陸僻遠の地にありて世にしられざる川舟
穏にして奇妙なる所なるべし　今新湊乃町より又小船にて
里ばかり荒田の本郷といふ所より四里ばかり此川の入江へ信
ひろく廣しにこゝ廣さ凡ハ弐里に湾をなし湖をあり挟く入江にて
縦に弐三十間の所をわりて是ハ本川筋にあらざるゆゑなり流ま
まにゆるして流もなきがごとし此日程に晴天にて東山岸の景色
うつりし入江にハ蓮の茎ことごとし最月頃ハ水面一様の花に
て見事なる事いはんかたなし夫より新潟の町より舟にて浮給ふ

荷華て賞し又ハ納涼なくに蓮華とて小舟船中より四方眺
望渡せバ西南東北へ六七十里と見渡して山形し西かへ
ハ弥彦山の前に佐渡山見ゆ東方に奥州会津の山見え北かく
のごとく四面打開きさまる坂無て北海の廻船出入の大湊なれバ
越後第一の繁華の地にて甚繁昌して外に又越後一
國の第一なり此湊に諸大名蔵多く建方に雪國の年
中冬ハ北の海の氷閉て舟の通路絶へ陸地も雪深く
海くハ十月より三四月比までハ廻船を出す事あたハされバ其一季
住べき処といふべし

三馬屋

奥州三馬屋ハ松前渡海の津にて津軽領分浜にありて
日本東北の限りなり昔源義経高館の難を避け蝦夷へ渡
らんと此所に来りたまひしに渡るべき順風なかりしかバ数日逗
留ありけるにたへかねて所持の観音の像を海底の岩の上に
置て順風を祈りしに忽風かはりて恙なく松前の地に渡
りたまひぬ其像今に此所の寺にありて義経の風祈りの
観音といふ又此寺の傍に大なる岩ありて馬屋のごとく穴三
つ並べり是義経の馬を繋ぎたまひし所なりとて此所を
三馬屋と称すといふ扨此所より松前へハ海上十里ありて三
馬屋の西北に当りてタツヒといふ突出する崎あり是より七

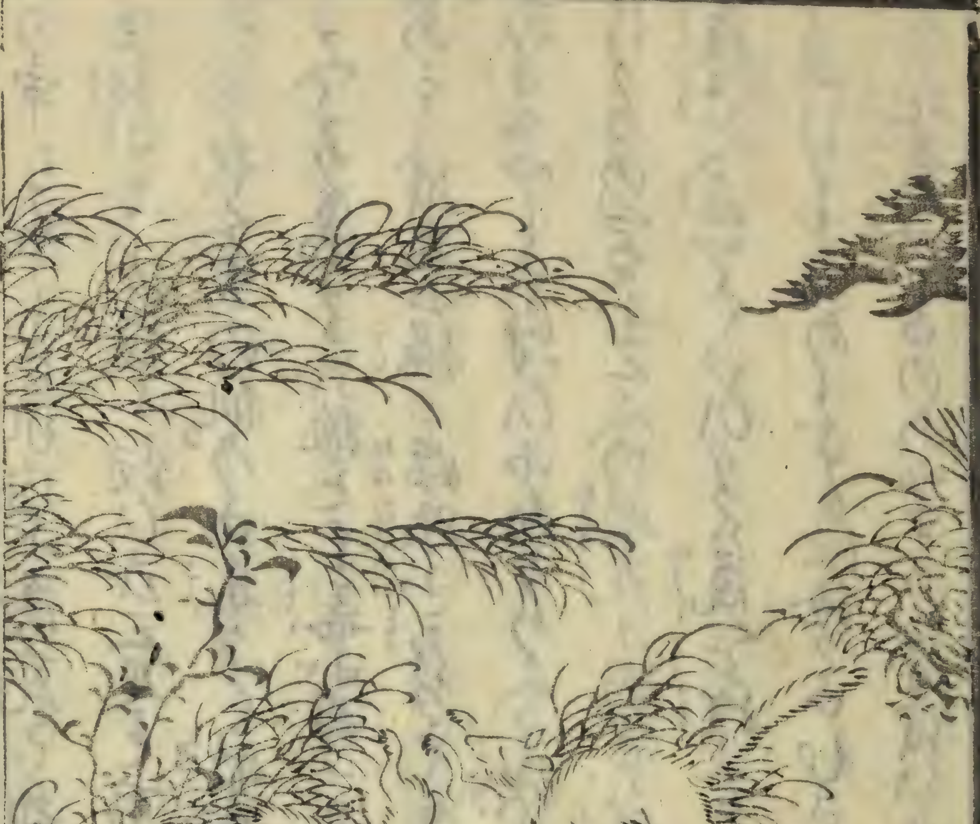
里ばかりなれども松前への渡海ハ皆三馬屋より渡るなり其
渡りたやすからざるハ海中に大河のごとく潮の流るゝ瀬
瀬三筋あり東ハタツピの汐といふを次を中の汐と云其次
白神の汐と云此汐ハ殊さらはやく流るゝ事矢のごとくして汐先の
勢ひ千里に及べり昼夜とも常に西より東南へ流るゝサ
シ引往来なくあやうくも海中に三ツの大難所あるがごとし
しもの方松前の領地と南部のヨコペの岬ハ海を隔てハ三を汐
合して三筋となりて東へ流るゝなり松前三馬
屋の前の海底ハ大なる岩ある故に汐三ツに分りて
ゆへ松前へ渡る船ハ至極の順風の潮時を見合せて帆をかけて

然るに陸より件の汐の所に至る迄ハむしろ抔を海中へ抛入て
こまかに矢竹村ごとく横に並切る事なりとぞかし
小さき風たちし時ハ此汐に押落さるゝならひそれ故流さ
るゝ時ハ五十里程沖へ流れもやらで大海へ出て
汐の勢ひはげしゆゑ所に至りて船とゞむ事叶ハず
前方にて船を留る事ハ人力にてハ及ばれぬ事汐ハ神に
も見るごとく常に西より東へ落るのみにて其理解しがた
き事也かくのごとく所ゆゑ我も松前へ渡らんと三馬屋
に至りしより逗留せしかど順風なくして日を過して凡
そ毎度順風なる事なしとあり又二十日三十日も順風待て

ことあり。それゆゑ不及ッテ此渡海にてハ昔より難船多しとし
云南部の田名部のサイ或ハヨコペの邊より松前の領へ
ハ海をへて天氣をまちて渡れバ海路穏にて渡海の便してあるも
ことゆゑに南部のサイヨコペの邊ハ三馬屋よりも十ゟ
少し東へ出たる地ゆゑ三馬屋より北の方に藍のごとくこゝの遠
くなるも是故也。此地の山といふ又田名部のヨコペの邊の山
といふ也。是ハ日本の東北の陸に濱にある
奥州の人もちゆる所なりとぞ

狐の義理

越後村上乃城主に百姓文蔵に娘二人持てり天明三年



の事ありし宮家の内に鼠荒て物をそこなひけれバ天子
と仮にまうじく鼠に飼ひ虱二足を取りて庭先に捨られし
に三まる稲荷の狐の子来りて彼鼠を食ひけるに一二てめ
しえける鼠の毒にや狐ことこと毒にあたりて死たり親狐ことに
あまりし我大に恨み婦姫に祟付てきつしゆうしたまひし
終日をやみくるしひ死去り又ゝ次の姫にとり付き其一月
けるの后に三人の姫死しぬれバ父母の歎き悲しくこなる釈
庭先へ立出てよくひろへバ鼠を捨る海ろ子にめて食る
しのふかをあらゝるに海ろ子ひきぼうて食ひて死しける
是も元来海ろ子のあやまりて食ひ害の毒ぞさの為なり

白山方の孩子二人までを殺すとハいかなる事にや讒口之
ともいひがたきあまりなる事なりと恨るものハ讒言新抗に
て朝まつりこしめやそ翌晩庭先に老抗を足死し居
ちら百姓丈婦も悲歎して咽び泣けり方より恨といひし程
ふとなくまたかくまづ死しけるとなくよる不便のことぞ
なかりけれバさはひふと云事もなく二重職親じき丈婦も利殺
し田地を賣り家業を捨て四国西国の順礼となりて出春
昔此者ども来りしと越後にあらねどもあるまじと云
付侍る　駿河の君

奥州南部の地ハ日本東北の極りゆゑ殊に野鄙なれ
ども人の気質朴にして又甚神仏を信じ就中伊勢を
神宮と深く信じいかなる貧しきものも男女とも参宮をせざる
者なし金龍寺といふ寺あるに寄しにこの和尚に対
祖父代々陸河と名付といふ金と称せられて拝ミても其の
其の父のいふにハかゝる事有し名字なるゆへ御身の父祖ハいか
なる家筋の人ぞやと問ひしかバ答へて此名ハ源さ
里人ども皆其の祖父東宮として人道をしらん諸国の
東宮玉風と見及びたる中に陸河黒羽よりきこハ八幡を
とよひなげ其の後も将彼此ゆるしく覚て其の事と

つうらの名を騒河と付く一生て経ぬ我父をもて父の名
なれば同じく諸河と名付ぬ其を又諸河と名付べきと
支那の衣服あまり大なる故に、あまたの国々其がうら
又陀といふとより全くも見えけれバ寄に然ひ猟猿
ぜう語に見るもののをも彼地の覚わするといひ出でき
ゆへし

三本木臺

夫南閻浮の地ハ広大無辺にして何れの所といへども此
地の広さに比すべきもなけれバ其七の辺に三本木臺
といふ所あり兵をかくたる無量の兵をもて四方目に防ぐるの

ありし此所東西凡二日路南北もわづか程ありといふ所に入
気もなく樹木とも一本もなく見渡す限り茫々たる野原也
其中にハ此辺の人とても四方に目を遮ぎるものなく方角
知れ難く七日も往来せし事ありとぞ此所にも野辺地
といふ所より七の戸といふ所まで五十丁道四里ばかりありて
其所ハ荒原にして此所もたゞ一面の芝原也此辺ハ少し高く
八里方の間に見ゆる西に八甲田山あり南東に八十二四里ばかり
隔てゝ三の戸嶽見ゆ東南八戸より十里計も隔てゝそびえし八戸嶽に
又道の南の方十里隔てゝ盛岡の岩鷲山見ゆかくのごとく
四方絡繹として数百里一望に帰し広遠なる事大海と

やうごとし右岩鷲山見ゆるそこ地の廣平なりと云ふ也
のなることを見るべし又一戸より沼宮内まで一驛の間なり
記に志るさるゝ七里なりと雖も密かに嶮し屈曲する人家の
續きたる所は他の如くにしてあれど全體は邊土へ人民まれなり地をしの
を北秋田名部といふ田名部の地は高千石のよし猪口ふ田名石
部の地乃北海へ出張る事五千里計とあるよし足まても
中國西國の一ヶ國の地面よりも廣し陸奥の國は廣き濟へ小字
なりと云ふ是によく人民のおほき故知るべし甚だ南部の地は海廣く
山深く平地も右といへども盛莫なるを以て新に開きしは
よくの田畑五千百万石とのべし呂振さるを土田を人民なりてなし

て南部侯は拾万石の侯なれども実は其土地ハ至て
肥なり其耕作の人すくなく将又南部の地ハ南より順く
一ノ戸二ノ戸三ノ戸より七ノ戸八ノ戸九ノ戸抔といふ地ありて戸の字の付
たる地多し戸ノ字ある所皆へだつ事皆三里或ハ七八里も隔
て山に拠り川を帯て皆要害の地多く所々ハ城跡とも見ゆ今に
くまた戸ノ字の付たる所ハ皆関所ありて往古蝦夷を防
ぐ関所なりしとぞ是を以て今に至りても其名の残
りしなるべし其内にも三ノ戸は北の果にて又南部の
城は今より六丁ばかり東に当り岩の上に残れり
其五里三十町も離れていへども常に蝦夷の

平なる所なれバはるかに望みて限をいふべからざりし
南部の北まで凡一日ニ七八十里又ハ百里も経行する事あり
かのさ仙台領津軽領も南部に同じ地ハ多く六丁一
里ト云六十丁一里を大道と云其地の人に里数を問ふ
に其人大道か小道かといひて其里数を答ふ誠に面白き
風俗なり

錦木

錦木の古跡ハ南部領と津軽領との境小湊と云所の傍
小高き所にありて東南の方へ除かに入る四丁ばかり
三絡にツキと云木の檜手の如くにして陸に大木明るが立て

ありしが近き年以前に雷火にて焼失せりとぞ
又南部三ノ戸の西の方の村中に錦木の古跡とて巡見
使のかならず見の地ありと云ふ是まさしく錦木の古跡なるや猶
名所古跡を伝聞より上方の地にては南部津軽蝦夷辺は
およそ出羽の国にても秋田辺ハ古人の遊びし事も稀なりしと
又名高き所々八極遠の地にも遊びしや外が濱など
北国の加賀能登越中などの名所は陸奥津軽能代も知れるなれ
けふの里錦木の塚など計にて壺の碑野田の玉川
なども南部の内とも云南部津軽秋田辺ハむかしハ皆蝦夷
人の住所なりしなるよし此頃百年計以前ハかく

全く日本の龍とかはりたる事なし

龍鱗

越後国糸魚川の近在黒姫山の麓姫川の岸水際にて
古より岩あり先年姫川大洪水の時水あがりし後
猟師彼岩の辺へ行しに如何にも白く滑なる臨の
ごとき物多く付居たり又岩の角の所に大なる鱗と見ゆる
ものあまた段々付たり其大さ五寸余あり何様洪水に
押流されたるにて此岩角に隠され鱗落ち脂あり
まも有るべし越後姫川は満溢のごとく寄る急流にて大河の事
なれば洪水の節は如何なるものも押流さるべし
則

撫師ハ玄猫と西国の今に面称せり人皆能の雑といふ

蚌珠

也かの南方海の石より出し形ある生きる蚌珠といふ序出手人ある
ことふり卞和が玉合浦の珠なといひ侍る人なるを記す
と顕はし字の見得の世にき世の宝としてその中君子温潤の徳
などふと読きり我が邦には昔より様々に在るなるとする
ず神代に曲玉まずくいへど今古家より稀出ることあるなる様あ
珠宝とみ人に抱くものこそ又珠玉と唐土の山川とする史ぞ伝
其越後に住ける新潟の人の語りしは此千字さへありて
に稀なる浮といふものありて此浮に珠とおなじ見ゆる貝あり。これ

大さ二三四尺もあらん月明らかなる夜ハおりふし二枚の貝口
を開くに待大さ蛤の殻をもあらはし見えて暁の潮
星のあらはるゝごとく光明赫奕として水面にきらめく
見るにそつく時ハ忽ち口を閉て水底に沈ミ或ハ暫時闕
明らかにしとを矢を射るごとくにさる事貝あらはれて其儘付
あんうりも二三寸大さ同じ様なれども八寸の貝と出ける初て見
ふりのあはれども若き貝にハ一くいすくなくあらはれのごとく
りぞく忍びて取りけり又あはれなる様にて見るかなるをし
八寸の貝をいふとも大なりかし唐土韓などよりの蜃気楼
ることく海に浮ぶものゝごとし

は鄱陽湖といふ右鄱湖ハかく尤大なる湖にて竟り六七百里
にわたりて江州の湖水と見ゆべし又は蓮倉湖白蓮湖
なる名並湖などいひて洞庭湖と名付るものゝ一なりし地
富ならざる也此洞庭湖ハ湖廣の江南の地に隣く廣大なる
る所にて其東西にて眺望よろしく又平坦なる土地より
其中に大河流れ上にて土地を平坦なる所に川の流れ入りあふれ
あふれてなほ南方へ入りくで湖となる也龍満流
つゞきて八倍方億ありといふ其湖太くして四里三里四方或ハ五
六里四方あるもあり他の地ハ地狭くちいさし八廣くあるも
土地よくわたりに川もある物あらて左右へひろく入のいく

まする楼臺なども絵にかきて老が身に洞庭湖青草湖抔
て湖とよぶ者則彭蠡の湖と同じ趣にて皆長江に傍て
湖なる小湖の池ハ地面に高下ありて山多く険岨なるゆゑ
に黄河に小湖あり本朝にて日本にてハ近江湖のミ湖ありて是に
こそ近けれ出羽の八郎潟常陸の霞浦抔かし似たれバなる
ことに実に文選なり

養軒が詩

飛騨川の波浪尾國の雪羽州の鬼沫洩の銭渇まみて
章句吾黄の上を先に年度とかはらしむ旅中の艱難ハ
いかばかりかと思ひとつけし事なとハ呂具を壱郵も法ひやう

鵜飼のかゞりぞらしの奥州の流に或夜ゆきの思しも
ふかうくも白波かゝりて是をばながき湯と浴るゝばかりの谷
川と滄浪の水と見ゆれし又善からず志士に涙をそゝぎし函の
右ふかきすの途をえあんじし眠らぬをふかきハ古今
しゆかひて柳ヶ瀬へとゆきしハ去年の秋なりしを今年是を
こゝろえく今ハはや四百餘里と隔たりし神無の波
里ハ六七百里餘なる行程と隔たりし今ハたゞでんぽうすら
め年老たる父とはいまだ今程ハいかゞ居ますらんことのみなげ
となりとかはし是ハ志ありしが如くいはゞ白ハ老親もち
古へ隔てて此程も殊つる危うしき事を降り又ひに行く

卒して危き事共侵されて命全うして京へと立帰り文字許の恙
文字も遂ささるの共学業をもとさ旅寝しさや旅かしん弱
くさしろわきさ居たる折ふし時鳥頻りに鳴きけるを聞しかは望郷
矢立を出し

相携千里遠京畿　旅館夜深燈影微
窓外杜鵑聲切切　請君細聴不如帰

望郷とともに文字の心ちよく詩作の道に入て学び
まされけれど実境に在りて実情を述たれば余を是を吟
して泣て涙悵然として是より帰省をとく事とはなり
奴祝寓居を出んとする時門生等皆共に請ふて餞別をなし

異なるにハ人ヘすぐれしハ絶倫にあらず才一丈夫ハ恐
しきを人へ小腸なべし扨数百千里の路程をあゆミしハ弱き若
足弱き者多く病の患皆なし年若とていとゞ着なし
大病する者ハ一つもなし寝食なかりしものなし是父母愛ある者の
しく其身を許すする者一つもなし是等の事とおもへバ異なるを
へこき若き時は艱難し辛苦の時は城中より来り居し文
よくその若き頃奥にて山なるハ日向より来り居し貴賤を見る
又此若きハ余り遠路せし附肥後の球磨にてありしと
し壽井信濃寺の家に儒学修行の為に来り居たりし
が十日余り同居せしが其ハ是附而の衛しよりあし余り

恵井と称し来る時荒野に従ひまゐらんとせしかども父
日向国にありていまだ漫遊の事をゆるさず主君(はくらん)に
邦にいやしくも他邦に仕ふるを許さず君父に孤負して帰り
従ふの為なしといひし小理に伏して肥後に赴きける
こゝに浪人翁日向に留まりし事は又不測の奇縁ありといひ
しかば父玄識悦びて汝いまだみなしといへども好事は〓龍
ふかく悦びけるとて時節を待つて九州の四国を押
領ら稽古の功を積んで我に老父の恨みを晴らし以つて一対
の書として示す送らば何ぞ我許し我ん主君への〓ハ元
人よく取扱ひて動ひ来は肥後にゆくるも四方に顕らるし

こまえんのいなかのおし車ハ聞しるなくおバすぐれ撥ニてある身
のあそびさくまじき事とぞ思ひけり時ニ松風しき人
もしくとりさみやまさるのならと深く志つきる其旅又ニ次
の年ニある翌年再び若年のいと田地郷ひ京師ニ登りて
余ニ従ひしく侍しが今年とは吉野ハ城樸めりその言之の
詞の曽る殘感し然ハ吉野か生る付右の注に合
く叶へるを以て奥をし識ニ其文の網目く越そ手ハ済
穗の為のことくなしれハ物執し難きのく侍しどと云文既
ニ七十を越るてハ只老人の吉野を緩りの為
またかのもの愛を割て師ニ置外ニ従りしむる其志

人の親もまたくまぬ之是其真の子の成長するにいたるにしたがひてとく家を東都の家へ日向へ申しつかはしける
ことを許しておさまるこゝろ様にして東北のかたへ移居して南部まで留まる若き君は我身の事よりも先
恭順の孫中病の事を勤めて慈しみ従ひ給ひしと
藤しくぞ有ける

東遊記後篇

一七

東遊記後編巻之三

四五六谷

南谿子著

四五六谷ハ越中飛騨信濃三國の間へ入り込る谷なり富山藩
る神通川を遡りて支流を尋ねてのぼるに甚深遠にして至
奥を窮る者なし今年飛州舟津の人あり此谷の奥を窮
んとて三日の糧を用意して随分川にそひて入りしに其食を
尽しもなほすゝめば魚鳥獣を捕り食ひて数日の間分入りし
に及て住ひし者の魚を捕り食ふ類を見んとするに異形の化物
なりて大に驚きて其夜退けるに魚鳥獣を捕り居たる者も驚きさ
ゑぎりて其を見たる事に呼たる者の顔面異形に變じて恐し

さいもんなどいひし事どもにやとみゆるかくハ此地に変てそのまゝら
絶えていそぎ近辺より遥遠なくたゞひとへに顔ばかり見えたるに何の
変ともなく其事どものごとくあれバ此奥にも山神の住所ある人の入
ることもと忌嫌ひておそるゝ変ありといひしなるらんとおもひてさて後ハ
奥深く入る者なかりしとぞ此事ハ其後ある人の物語りにて聞しに飛騨の山
の人ここら在にて住る猟をなしける者ハ山神の変にあらずして山と谷との
日かげにて年ふる人の顔の異形に見ゆるものなりとぞ此地の中にも人の往来
ともなく谷底にて人の顔もくらき事ある事もあり谷深くして行きゝのことゝなれバ顔
色暗くのごとし此道にて参り別れつる人ハ是に難くてなれどゝ面乃
人ある事ならねとかくあやしむ事なかれと云うかの国まではい

まくゆめのゆめとこそしよ形見なりけり

一　舟蔵西扇立膀

越前国敦賀より西北に当りてハ吉里計常宮大権現の傍ハ縄間村といふ所あり海邊の里にて家々ハ漁業をもつて此村の庄屋を舟蔵西扇立膀といふ此家ハ舟蔵別當真盛か末葉にして家系ありと称し古附より今に代々家を續して舟蔵西扇立膀と名家を稱せられか世の庄屋を勤て其重る遺物も今に多く所持すと云微か邊鄙の百姓にハ浮沈盛衰ありて数百年の家を保てる者多し余も家ハ未詳せし時彼家にも尋ねて真盛が舊物を一見せんとおもひしかども常宮の御ゆりとて所よのりて又幸とくの他

なとりあまり遍土ゆゑに居紙こまる人たなまです埋まる
るこそなす氣のことなりとしへ

北極星

北極星は天球のうへにかゝりて地球の南北をかる事に依て異なり
真の北に貮拾五里程を隔てる時は天まく壹度を遠くる故に
北極星の度数を知るときハ居ながら其国の南北を考へ天文の暦数と
知る醫學んでも其國の氣候と知られバその國の陰陽の變化と
尽さず故に疾病を療するまでめくりを施す人（天学に精しき）
人萬國の度数と志るし事又日本にても諸国の度数を詳に
志るせるもの有り余も陽暦の法にて推して北極の度

数度測試て清日の考の二脚と云んと旅中にても用ゆへき測量の器を新に工夫し造出して携へ行処ごとに測りみしに其誤甚少し富山西にて見る所に北極出地を出る事三十六度半強之出羽国秋田四十度半之奥州津軽弘前四十度四分之同恐山四十度七分之同三馬屋四十一度二分之南部盛岡の西里に不盛氏と云所の西里にて四拾度七分之強なる處ハ日本極北の地なるべきにもおよバず宮ノ精密に測りて分厘も不違所四拾弐度弐分之強東北之地の伍サヨコペの事ハ是亦大に北よ出てしハ四拾三度にも及ぶべし云ふ地なれバ其の北に至れバ諸国津軽地ハ愈寒気烈しく海漢皆韃靼の沙漠に似たるもあるべし唐土の北京も四拾度強の地なり

きハ北狄沙漠も四十弐三度の国なれバ也又日本にて極南の
地ハ大隅国佐田岬是三十一度弱の所也是を以てみれバ日
本も南北十弐三度に及ぶ其うちにも京都ハ皆
人の知るごとく三十五度強江戸ハ三十六度弱唐土にても洛陽
長安抔三十五度の所とぞ云斉魯ハ三十六七度の所と云誠に唐土
日本にても中和の所也三十五六度の国ハ四時の気候正
しくして人物も聖賢抔出生し草木もよく暢茂す南の方是より南ハ
土気温暖にして物弱きところ有て早熟すといへども山岳も高
からずして穏也北にあるものハ土気寒冷にして物結凝らし水すみて
も水の山岳も峨々として峯そびえ高し陰陽量ハ蒸めて極

奇妙なる事どもなりけり

登龍

越中越後の海中夏の日龍水をまくといふ事あり其龍を見て
一村皆こぞりて此事を見れバ海中の潮水を雲に吸ひ上げ逆さまの
ほり上るの中に今さら登を又見せしかど竜の形見ゆる
ことも絶てなしども奇なる事に見て登潮へ登を逆さに垂るごとし
しく又其の潮ふかき事に雲中常磐といふ所のうちまるく十余里の間を覆ひて
是龍登れると見えしとぞ又鉄脚道人退宜の時代越後の
名立の沖に逝ては通りし時海底に大龍の昇るを見しと
とて此傍話の人々事を時代に語りぞ此海底にありとある

あるひとのいはく見たるハ昔龍なりとあたゝかき奇怪の事なるに一年
法国子の劉記ともかくも中に或人江戸より船その頃や
し小笠原の沖津の沖にて過る時に一むらの黒雲虚空より
緋船とさして飛来る船頭是を見て龍の昇天と思ひ見れ
ばまさに海原より白気立のぼり竜切て焼べしとて船中の人々このことを
頭髪を切りて手に捧げ小息氣を吹かけしに雲にかくれて
さまざまに我も是を見しと語りしとて亦
実へ唐土の書にて見るに蟄龍の登るハ必雷の震ひて
海底より雲の状をなし雷落ると見えて日本にても
龍と雷のわけを知るものなし余思ふに阿蘭陀のエレキテ

イルヽを照らして三ミシサリの兄は茶碗に入しけれバ茶碗の形は入る也
く車はまはりしま茶碗のふちに指は近付してまはる自然に近き
登る勢ひありて上に悪しき物なれバまはる登る事なり又氣の
上にハお悪しき事小器の中といへどもかくのごとし況や天地の氣
ありて其月にあるれバ悪しき時は登龍のごとき事もあると
ハ云べかしとも

黄鐘調

撞鐘ハ黄鐘の調子に移るものゝとぞ兼好が徒然草にも
大坂の天王寺の六時堂の鐘ハ黄鐘の調なるよし見へたり
今も天王寺に移りたまふ鐘は撞の時にあひくべからず又

ある年盗賊して摂州の多田山霊林寺なる律の什宝
とかとふ鐘銭中より出る事あるしく撰集記のもとにも見え聖
徳太子の時打鐘なりし今度又越前敦賀の常宮に詣で
しより此鐘尋常の物ならず是へいふそくありて見と
見れば龍頭の様より完りて全躰の形古雅なる銘と云
ば朝鮮の文之豊臣公の此大谷刑部少輔主宰として来り
し時彼鐘を奪ひ来りし鐘此寺に献ぜしと云傳ふ
其銘文に曰

大和七年三月日菁州蓮池寺鐘成内節傳
合入金七百七十三近古金四百九十八近

加入金百十迮

成典和上　忠門法師　縁糸甜法師

上座　則忠法師　都乃法昧法師

郷村主　三長手　朱蕉吹尕

作報舎　筌清軍師　龍碎軍師

史六　三忠舎知　行道舎知

成傳古　安海哀大舎　哀大舎

節州抗　皇龍寺　覚明和上

かくいゞし朝鮮文字にて読難し此音他へゆるすに成べし撞事禁制といふ札を掛ちて入れねハ寺僧おさへて撞よしときけハ

入るゝハ必ず守べしとなりしに言葉石のごとくなりしが獄に登
すべく禍に陥りて其身を亡したりしかバ入れ置るゝ入縁の
名ときまりず顔色に云くまするしらくはらくのちに此縁に
穴銭穿て口の其縁の補にかん高あるをもて縁と縁に穿て縁記
よりく穴銭穿てハ穴の大小によりて補子を便すべし其縁に
合せらるべきがく穴と廣免其縁の字弟まくく穴にあてて合
く縁と其縁に縁んとく欲せハ縁十通縁ゐるとも二三穴年に
生る年ハ雅なるべし猶両閣寺の縁銭發ち縁入られしも
初に全く縁んと思ひし所なるべし説る穴銭穿たざるも度
而て又補のべし佗もはた古記縁すりして穴あるハ皆必其縁の

調子なるよし尾上刀田山の鐘は常家の鐘なれど古人も説あるハ
し鐘と見えて名ハそのまゝ世ゝの伶倫律呂の事不案内にあり
又時知るにもよしとせし又鐘ハ黄鐘に移といふなるたる事をも
してみづから試る事に偏りし所に鐘に穴ある鐘ハ奇妙しくすべしと
其音の為にとていふなる説ありて来りなりと
古くよりの寺もハこと〳〵日本国中に黄鐘の調子に叶へりとは聞ども
鐘ハいまだこれをみず又穴ある鐘といへるを見ることなりし余も尾上
此鐘を見しより穴ある事をいぶかしく思ひしに常楽寺の鐘へ見
刀田山の鐘の如く穴あり調子の為にせし事ハ悟りし今
より後鐘を揚る人宮を穴たハ黄鐘の調子の事をもせん為

いしゑをさすなるべし又或人の摂州東長柄村露満寺の鐘を云く
鐘の音ハいといひし是を様々に聞見すれどいまだ是と調ハいかなる
や又一とせある神道者の神前の鐘ハ双調なりとて試みに
琉球より渡りし調子に対へる鏡ありしかバ余が知れる人新に鏡と
いろ〳〵に数十度試ミしかども終に双調の音律にハ叶ハざりし
かバ是非なくて双調にあハせて鏡の面を減らして双調に合を
とり是にも又彼鐘に究めて今ハ和調なりし余か行遊を
しるしかくひとしく志す事をも遂すべきの鐘をゆすく
古律にあふハ事と知り東長柄の鐘と見えて龍東北
朝の北燕の頃より律真の黄鐘なりと感心し又今に

以黄蘗補の補紙補ざしめく数十枚に及ひて是を伝へさら
頌画讃すも考らずて書残加もりこそなけれバ別に音
律の書にあらずりしたれバ此記にハ略せり

箒木

坂上是則の和歌に園原や伏屋に生る帚木のありとて
ハ見えてあハぬ君かなとよミし箒木といふ木信濃国
薗原にありて遠くハ見えながら寄さていへバ源氏物
語帚木の巻に両説の説ありて此宗武田もん説に見
云真字伐ら奇怪さりとこしのみそこしなるのとも如く
思ひ居しが信州に遊びし此まのありの見て驚き東都へ

又木曽街道の驛に妻籠といふあり其妻籠の驛より木曽街道を離れ間道に入る是は飯田の城下へ出る山道にして其名十里峠遠山越谷升まで樵者の通ふ細道にて蘭廣瀬抔いふ在所あつて草谷といふ所あり此草谷といふ所より草生茂りて入る所に木曽峠と云大なる峠のほとりなり此峠に王平勝負平抔いふおしなべての平坦の地あり扨此峠谷の左り右の方は深く大なる谷にて底に谷川の音ばかり聞え其谷深くして向ふに雑樹深く生ひ茂りたる山あり其山の七八合目ともいふ程にも此の木ありて大なるそ本屓て石垣をもこの木に倚てたの方に葉玉

九小成りたる木ハ仙是まし人ハ蓬萊園小ある心字池の志ぶきと
なりし也其モミの木と言ふハ雑樹なる中小
格別小高くそびへ見申是即ちしかしその
其頃小の木ゝ天くかつ日小見申なの其林の中小
ゆき見ゆる時ハ新らすとく其モミの木ハもとよりて見
るごとく小在りとて今も名高く昔よりあるの見え
こゝ遥まぬとまりひかゝるかゞらしめて實ハ無三源氏
利之寛の頃あるあひありはる子ともし勅勘の身となり
より八廿丁斗ても隔ゝて所の百姓の身ふ△人ゟハ天照
太神の御時よりみえる神木なりと云文舎を藏す一者の

のつひし二代にして奥州の金売吉次が通りし時より
ありさまなりしといへどもその跡も見えず昔の繁昌の跡もなき
ありさまなれハむかしの名所も今にてハかく辺鄙の中
のものとなりぬれど見る人もなし八幡太郎あまたゝびこの所を通りて奥州
への本街道にて鎮守府将軍なる義家の官へも度々通りし
それゆゑ名あるのみちとぞ言し辺に源平合戦にすべて和する程も王子構
貞任宗任も古戦場といふ文字も東の風俗の最中ずひとつの和
ともありて古跡ども見ゆれども今のごとく人の通ひて極卑にて
ハあさましくもいへば又其のあさからぬ伏屋といふ村
ことありとなく古名の詞を今ハ里の名とせしものなりける

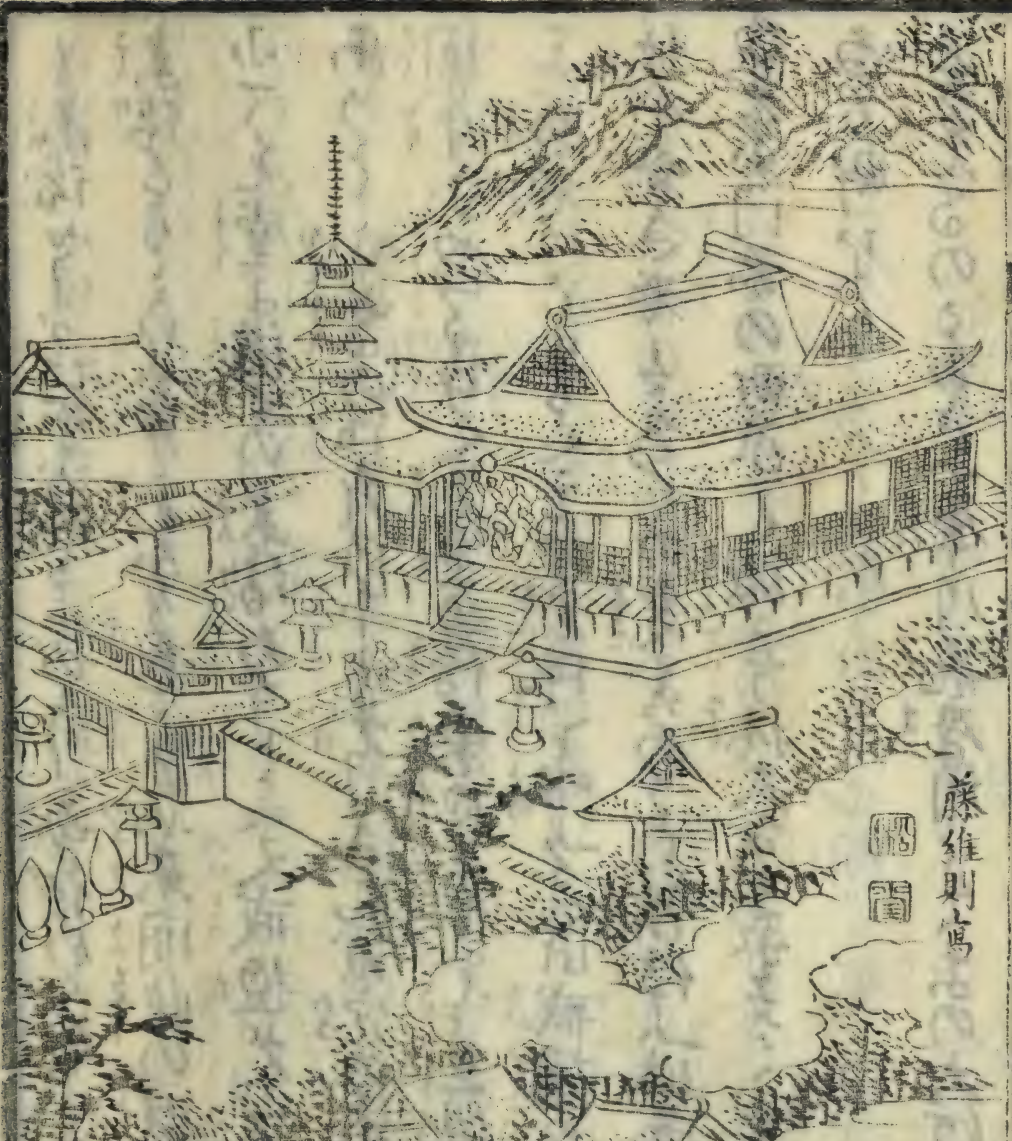
何も御寺号妙の神原寺に於て出る處とのくき友人嫁苫師も見
知らしとて語り合へり

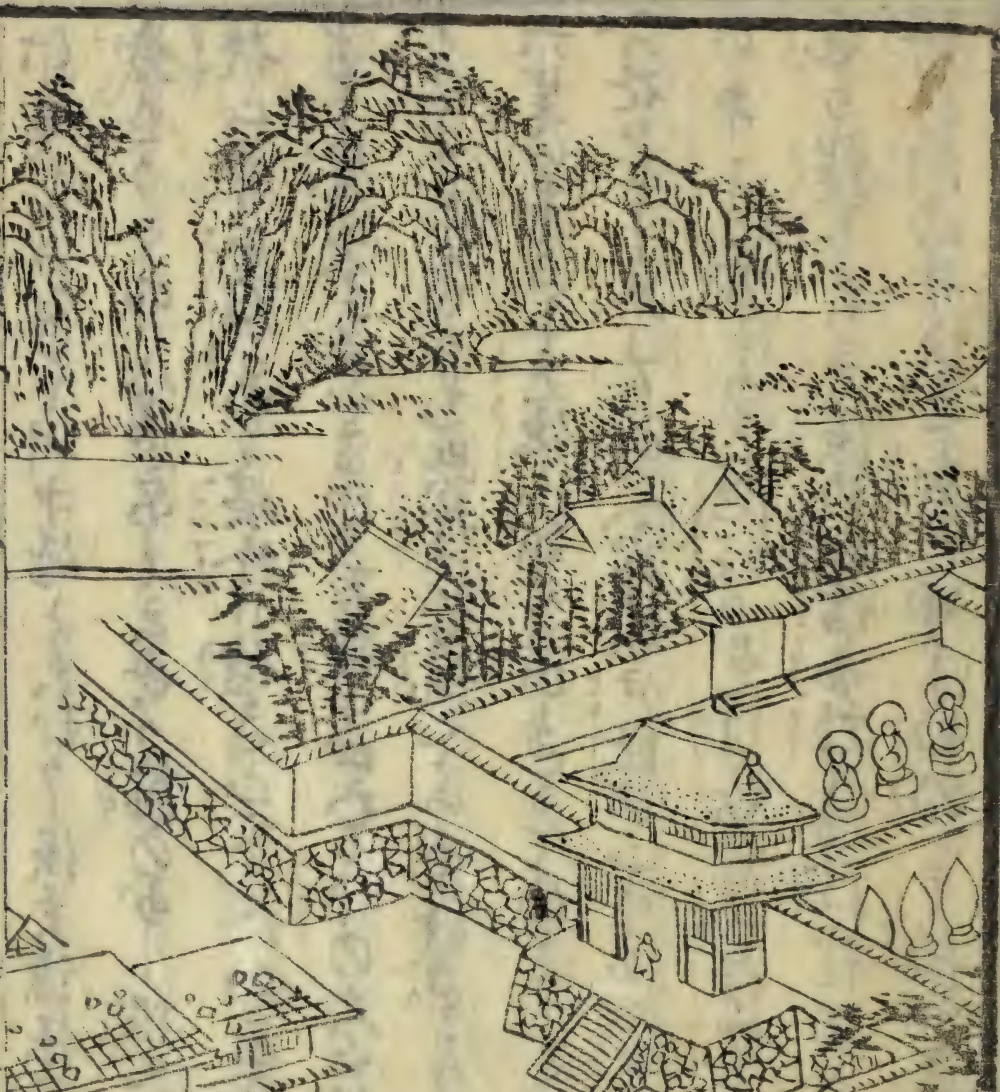
善光寺

信州善光寺ハ格式の霊場にて世の人の伝する寺にて本田
より参詣の人絶ず堂塔も広大美麗にて田舎にハ稀なる
寺也本堂南面なり西より奥まで二十六間横幅十九間程
皮ふきにて八棟作りし其外皮ぶき也此事ハ信州人金仏大工
田中なる丸にて八棟造にて四方の大屋の町家百姓家あり
瓦葺にいふその外ハ橋より門まで本堂まで三百間の敷石
又く見ん事也善光寺にまいりて本堂に通夜とる也ハ数

親族をしく人の死去ありし事を尋び逢て毎夜賂多き遍
親人ある余もとあり通夜をいふ徹夜廣き堂にあまりてる
ありきにバ喜む施物にて燈明の光りを湧して人親をさざふ
ハかんと欲念佛の声遠に聞えていと静まり稍の程ハ今をの
くつそふからびしいよが袖夜をと己き哭声をあり夜ますうものふれ
出るいつと眠く小人命し當り數十百人に及ぶ見聞亡者の弟子
あらと云扨丑刻ころに毎夜必ず年の開帳あり寺僧達の經
よう多識引く戸帳を開く出しても開帳して夜ハ更ぬ
然大の親ハ其のびてし人をあつく堂ハ廣し佛壇殺いと
蒸し我しけ時伝名の人を懐て流てずるハ其余も正方の仏照、

も参詣せしが此所に掛ることの有り毎夜かくのごとく詮くの
参詣とあるといふ事もあらしも如来開帳の時刻を見いり
にて本堂に満るの参詣あり是へ又戒壇廻りといふ
ありて本堂の床の下を暗き所穴の中に入りて
闇中にめぐるなり先達の僧案内して先立件の穴へ入る
三遍廻りて出るなり念仏を唱ふる此戒壇めぐりの時も
信心無き者ハ色々の変異ありといひ傳ふ此寺かど燕昌
西の方門前の町家ハ旅亭并茶屋多くして小ざや繁り
なる町なり
善光寺のこなたに犀川筑摩川とて西の大河二つあり


藤維則寫



此二つの川の名を川中嶋と云むかし信玄謙信の古戦場なり
犀川あり西ハ八幡宮と云西の方筋のおかし根之又此を右ニ姨
捨山あり更科あり姨捨ハ俗ニ云山の郡三ヶ月ニ堂あり
里ミ堂の前を道ニなる郡十四五ヶ所の大字あり古道より
あるよく見ゆる足姨捨の古跡ニ此ところ又此道より東北方へ
六里の道をさぐるに戸隠山とおへるはあまての宮也余ハ戸隠山
へハ花のさてこそあまちの人の中ニ戸隠の山中ニ洞穴あり洞穴
の中ニ昔より九頭竜の見ゆる九頭竜権現と云ふ今に
其の他古より戸隠の社僧毎年九頭竜権現へ供物を備へ
件の洞の中へ運び瀧のそばニ納め供物をおさめて

あるとも此怪説の奇談いろ〳〵ありて云葉にはつくし難し
とも云誠に奇異の事なり

諏訪湖

信州諏訪の湖ハ周廻三里の小湖なり辞をもつて乱山すき寄
の中にあつて景色ハ無双の地なり此湖をつらぬいて富士
山の小面と見る富士山峭壁にして実家と此見るも富士の
躰と此湖をうつ見るも又奇なりといふ相此湖ニ映写すよりも七
不思議ハ此等のあるを中にも殊更又奇妙のこと〳〵ハ此湖水
冬ニ至る色ハ氷の張ひとして一面の氷となり厚さ数尺ニ
及ひ金鉄のことく成りて平地に異ならす其氷月より明年

の一月まではハ人馬皆氷のうへを往来しておのつから道をなして下の諏訪より上の諏訪まで二里の所なるを氷の上を一文字に通ひ行る故纔一里にあまりて甚便利なる也いかなる重荷を負ても渡る車をもむかしより氷裂て水底に落入りし事なしとぞ是ハ不思議なりと向ひしかば其の所に神慮のあらはるゝ事ありて御神渡毎冬ハ氷裂ありてもし其中に湖の又御神渡りありて後は氷はゆるく厚しといへども恐れて人を渡るものなし是を神渡りといふなることとやいふ其のはじめ一夜湖上に大なる音して裂て一筋なるこぶし程の径て尺ばかりは氷の上を一文字に区別ありの大石大木ずらと引通りたるがごとく氷左右に見れもりて其跡のあらはるゝ是

神湖乃海こほりとけば湯ハ人馬往来しく道ち無し二月の末又
さるまあつくをはりてハ湖をわたりてもしるまでなり傳へいふ諏訪明神ハ狐を眷
属としたまふゆへ狐ハ氷の渡り初をするとかや此神湖ハ明神の使しめ
の狐の渡りそめをまちて又諏訪ニ温泉ありて諸人入湯する所之湖
水の中にも温泉あり常ハ知らざれ共氷りたる時ハ湖中にても
温泉の湧いづる所ハすこしも氷らず氷に穴ありて湯氣の
昇る又下の諏訪の拜殿の板壁乃内に穴あり上の諏訪の瑞
乃氣まで流しきたる湯を樋にて入る又上の諏訪明神のみ
まへしの御手洗ハ四季ともに毎日おし付ても雨降しすこしい
かしき事又明神の廻廊の板敷行と聞ひそ人歩行すれバ

奇なしとて所不思議なくあるは東海道にある天龍川は至極深淵
底深淵なる流れ至るに淵あれども底深く魚鼈多くして
是の利益ある事なり

鶴岡慈悲

天明卯年乃凶作に奥州津軽南部最饑饉して足腰のたゝざる
者は四方に走りて食物をもとむ羽州秋田隣国近くなれば饑人
の来る事数万人秋田の地も亦凶年の事なれば救ひ足る事あ
らざれば饑人溢れて又鶴岡に来る路の饑人ゆく押あひ
ゆく食をねがふ者はたちまちに化して饑死せるに依て鶴岡
の人も各身上の分の力を尽して救ひし事久しく年に及びてれ

りれにやめしハ諭本今志與といふ者本ハ露宿の中にそれと窮
しおめりしかバ其の所を出奔しけれバ今まされハ役者と云つゝ自ら
耕作して渡世しけるか人ハ元来慈悲深く仕事を守代の隣へ
出し餓人を救ひとゝに従飛騨飢饉と見るに志のいよ〳〵篤る
の田畑を人に譲りて貯をとく〳〵売払ひて其力の渇を救ひ
其後ハ妻をも又人に売つきて女まゝ自分の衣服のれとさらに売
払ひて救ひけるに時々れ衣服総ふ迄のこともおこりまづしき時ハ
せむかたなしに遂しかば或日ハ己れの衣服も売りて救ひけれど云今右衛
其餓ゆゑ女ハ猶更衣服などして受るもの多かりしとも
売りて餓人を救ひれとぞ女ハ紺縞の半をうち着せて男

とまどひ又加へ出る時ハ客のまへハ我とくとけはづる事なくいはひ
しかれバ妻ある人ハ下とも若衆にても書べくなく客あしらひ
こそ加へ出る也とあまた加へ出るにそし擂も明んずして会之
今度客と言ふて加へあまる事あらバ擂と無用へ加へずして
無用なりこ無用の様子ハ何とあるべく人ハ見くるしき事をいひ
あバ又惰悪の人へども救あるべしと見は不当と妻く救へ取て
娘十四才より始りをもちが同し年ころの小娘餓ぬれ食をもひて
門の方へ出小を作海にあるもうて組食の風邪をひきハ病を
ゆるさぬとやへ嫁うつくさに小娘ハ女うて窮乏の部るへまち残す
にやすとひ振ひてぶへたるあまた格母親にしまつて我紅で呼ひ

こゝらは聟入致して妻子ともにあつて不幸するがあの子は誠に不便
なりと思ひ拾之年の程を問し位からは衣服を祝ふるべしといふ子服して
暖気なる若ければあまり言ふからずは元聟入さすことねらせてあの
小娘にとつて世のまじはりの人は娘色ある事によくよく志んしんして実子なき
ふちとさ言の聟入と思へて里父母をも小職と流して顕へて里よりと
又鶴亀の町にては小比塚といふ所あり比塚に居る堂前屋あ
ア禅宗あるの道徳を学問とありて是まで年来大法の
住職とも言ありけるが老して只辞退して比塚に小さき草
庵を結び毎日来るほどにしてゝ日を送し夜は近隣より
外は暮るとび諸付に信者より朝夕に[illegible]すゝむ与へるにも足

を着とし寒き夜ハ夜着ハすまりらも乞食非人に與へてをのれも別に蓄なくして古衣類を着たる人なくて皆呂満堀の和尚とのみ呼奉るに此和尚彼銭鐘の時露見の節にも来りたるも番の家々はいづかたへも町家打寄て無非にて加への人々も頼りに勧化し昼夜をけめらず出さらいかする程にて毎日々々銭金を掬て集めさらに集て此和尚と信仰の人々追々加勢して世話をなし始終銭金に与へ施をなし其施ハ凡人々にも凡米百八十俵て金六十両とぞ此和尚の力にて施しあるも此和尚常々ハ人に物語も虚なく流浪の身なりて昭元の御作をせ次法議望園の僧多きハ諸人とるに信仰帰依して皆々

多くの義銭を寄附して餓人を救ひせらるゝ此二字露呈よりの伝
田へ下る川舟の乗合にて露呈の人々にも治して称美し寄
けるが見立の墨もて書付置きたり諸人露呈を荘周と称し
て義穀沢山の中にして元来大富國之富人ら彼ふ人の心
温和にてかゝる仁慈の行ひも多かりきと見えたり

東遊記後編巻之二

一七

東遊記後編巻之四

熊野御前

南谿子著

東海道筋天龍川の東岸に池田といふ所あり此所は熊野御前の古郷なりと傳へし云熊野は池田の長の娘なりしとぞむかし内大臣平宗盛公に仕へけるに池田に残しおける熊野が母病重しと告こししきりに国へとて老母の病をとぶらひたしと頻に願ひしかど宗盛の寵愛深かりしかば暇も許さで彼謡曲に作るごとく一日花見の酒宴に召具せられしかるに熊野は君の詞も花の頃もうち捨てゝかくあらんよりいふにせむ方の思ひはいやましければし東の花やうつるらん宗盛此哥を聞て深く感じて暇を給ひ

いとめでたかりし鍛冶屋ハ世の為女ありしかも至孝の名今
に朽ずよく其里に聞えしハ人に随して昔此あたりのむほとりの聖
むかし平家を逐しの栄花も夢となりさもあらし後に池田の里
と天竜川のほとりに昔の俤も富貴栄耀いづくにかあらんや
しもべは名にして名の実は忠孝なり

羽州の鬼

出羽の国小佐川といふ所にゆかんとする時ハ年中の刻をきるほら
んとおもへともこのたびハいとゝくるしく羽ふきのやうら志免女らに奥羽
く日数をさぶらふハされども先の衣まで八又三里ともわたしバまく
ても日の暮にハいたりがたからんやすまて道中なればさひのあ

に附けあらかじめ見まりやわらんと疑ひぞりし遙か老丈に先の眉毛
せく小日ハ善まりやと宗に眉をひそめ居たまへハそぞさむりく行付
そもしむりんなりしと見きハ幸運の人にてこそ出羅ハ止めなりま
鬼ある人ハとらり倉に神妙ハ夜る中まりしげをきさ淡す歳
アすくハ白昼に夢く此居行ゆふまれハ馬の花やの去らく分れし
ざりハ去し是をの後を鬼の出かりなり小命をきむ蒙ら
しハ運つよさ人へこそ是より先ハ行すら鬼あし離をうる命
ののうくこそしたハ戒ざの風ハ知ら得ども日毎よ居んてみり
まんハ危しと云き行も叶ハらや無ふいうに道五に来のまへ六
とて人へ我驚りとも様こそあつる見鬼の人へと取り合に相ハ

昔噺ハ草双紙あまたあれど事ふりて二丈の出覚を今の世まで伝せ
されば年々なりくだる大鬼ハ青鬼赤鬼の虎の皮の褌ハ古き
や新しさや新趣向の献色て鬢しあてゝ狂時刻のおほつかなしば
あやしの川を尻に今く日白ごうらふむうふの宿まゝでゆきさ
誂へしゆきと間ふ世おもしと驚きしばらく禅の人ハ不敵
の雪紙宮ふかりのうが此鬼ハかぐらう鬼あきといゝすして三年
ふ行色むりんやこのふとは里の人をうろまてろとかと隣村の
九成敗あらまてろわかおも話しといひて時刻のうちハ居やも
せば同しれずも人紙あざろうすりのやおと鬪ひて曲ッて文人ハ
聞つふ又鬼のうけいよわぬしくる短れりしられど三人まで

同じ舟に乗合たる人々談しけるにも、あるひは言論に及
かなへる詞をあやし、耳に日比見もきかぬと見ゆ。面目なければ傍
て聞しきかん身をしのびて聞きつべきこともあらば里
に着たりとも、なかなかまじはりして身向く鬼の
事いひし今夜は此里に宿かりなんといひて言葉も同意しつく
よしと家より小へ入て、夫婦同じ口に鬼かみつくさまの
振いして恐るる物にはあらで、こゝにある、しかも古郷をさして三百里
に及べは、かゝる奇異の事もあるまじ、返事もきかず宿の求ん
とあたりをさしてたづねありく。ひとりやうやく六十に余りたる老
婆あり。二十四五計なる男と住ける家に宿りぬ。飯をすゝむ

さて園燈裏よりて本貸の暇をきゝくも又波兄
のらす尋ましバ老婆あ迎ましおのゝきこしに事をかき付ならう
かいふ鬼女の女ニちく云葉一ト目に迷ひれて卯の事識
いふとも杢ゞまひけらバ其鬼ハいうまの形で額に角と刀んと揺
小虎のほの嫁んどし也りやせし人ハ男かゞりとぬりて左れ
みりのやらであらずとらいふ旅らハ此のかゝるきものぞくハ只
犬のごく西してかし大きなりと云をんそるく口大なりやせ
同へバさごとしと云ね八狼母とハあらじやといふに狼とも
いやとゆうしと若ふ養所新と刀ん合をぬ八太りくさなしらぬ
居まなりといふて我先程ゟ里の祠ども儀に謀に流し

ん絶して恐ろしき事いふてもあらし随くくりしく実に此比ハ
佐川の人も六七人まで喰殺されしまゝか此向ふ我ウヤムヤの里の
者に疵かうむりしに彼若侍強勇の男なりしかバしも纐付一身乃
力をもしまくはひに指て纐伏をせまりしに才にす鉄も安まさん
纐伏を下ぬ過を逃がしれうんとも志ぶつてせうしふかくさりて石猿
ひろひにまちんま猿以て猿の頭をきせ砕で殺しぬされど
其身も数ヶ所手負ひし家に帰りて死せり。あゝ此者の事せく
恐ろしき猿ら友集りていかなる是を猿に疵付て白昼する
数十足出て人をも害をなさん我ら貪狼の為にさ邉境
来りて命を失ん事いかばかり口惜しきことなりといひあへり

さはこそ夜ハ目もあけれ足もとゝろふらんとする程しりわれ事もなれ
ばらく此里に住るべき身にもあらねバ盗せらバ衣服へとる悪
ふへし仇なりがば智略をめぐらす施すべしいふもさらし異類の獣の為
に勇を恃むこと猛虎を手にするおもひすりて恐るゝ
者のなすべき事にあらねバさしつかへあるまじきの事にせんやさ
りつゝ獲ふあるておみる隈なさで行先ハ連山波濤のごとくえ
山きはあれる中を越えゆかんにいかなる此土の猛獣かおそんとあ
らぬまよひて費して種なく扨あともぬ中くに手立べくも
あらず孫ハ件の男をすゝひて此里に馬あらば武丈りて與へ
ん珍膳ハいとりじめして今にすらに教しよ駄賃を賃するハ心あくつり

と八郎しに掛し志ばらくといひつておわりしが程なく帰りて三疋
しかくの價をうけとりきの旅をとらせまゐらせ三貫を懐に納め
我が有商人あり人衣有り居て鬼ぞおもきもの三疋をとりて居
いろしが替て去ちらの手段いひてしばらく連あるも同
道して出けんやと甚だ相おりもと云物は去て味方と返ち
は方ろうと舞乱まきとその銭とをまじくらら彼商人と申合せ彼
商人ふつかて商人ぞる四疋ふる士四人手ごとに長き棒を携へ
魔物ありといふ出る指にあると小ゆうもうひ連す勢のいきほ
ひふさて免さま出しましバかしハ安堵してよくとひ頓ひし程
まもあらばしされども出あらんと四方に眼をくばり行

しに遠くして守護に命一の宿に付しが関にありあひしがまて
行きの所ニ至りて木を砕し狼の頭をよしおろして體
ハ何方へ取去しや見へずして其のちまぢかに此道
筋三里の程ハ人家もなく至て萱原にて細き道筋数付り
殊なく山にも狼の出る所なれば是を見ると宿々の宿くらべ
商人と一組になり道して宿に至る事も用心堅固にしてゆか
しかるに六里の程なれど鬼の濱辺にある謀に人の危
食ふものの用意をせずあらけそハ能ふ鬼といふなるべし
古風なる事なるを猶是ほど今に至てハたのしき物語と
もあるべしとて此の物あんじ筆の跡に記しおくべし。

松嶋

五月八日奥州松嶋見物のために塩竈乃町杉坂といふ所の
津國屋和助といへる旅館に宿をあてがいふは眺めの松嶋は
見物は筆の及びがたくあまりの奥の座敷に泊りし先年伝僧よ
そく四五人連にて舟にのりて松嶋見物せんと宮よ同
船して見物しけるにいふ我まゝに連して祇の僧に
詠を聞かれんと出して居るうちに奥の座敷僧の鳴声
振舞で高殿に茶の湯の用意して浮かれ合近所
の騒ぎ呼ぶ人と日暮まで酒を呑で大会ハ亂のふ
唄ふ浮舞さすがにかしましきに奥も申しあぐ迄も
口

耳ハ妓女の色ある三味線ハ魔魔なれどもあるハ詞ていひ
ゆすり付るうらやましさいふもさらなし飲酒放逸のあさまし
座舗までも海のごとく物を不断の法師までもうかれつくし
こそ知らぬめぐみにいさ狐のうそをらんといふに諸毛まその
まゝに狭へて夜の更ぐらすく流色揺ふさふ手をへて踊る
をらの手異あるく此法師らや因縁をあまする柳の風
ともいふそのゆへにかくなりしはあくまんあく不祥の至り
〔ハ頭のうちを〕口よりまうすハ因縁のくるハせならぬ
くらひたる〔塩竈〕の浦より松島の雄島まで三里半の舟路
賃銭僅に四百文にて小舟を一艘買切漕出てこゝ彼処の

やうにて風は大海のなかに未見はなれそうすべし東に向ふて行
小岸より北に凡二十丁の所に小さき湊あり弁天湊といふ是より
十八町斗して其の先にてある雛湊あり右の方に東宮濱といふ
里の向ふの沖の切戸の有様にて満潮と云左の方濱は山と云
に漁家あり雛か湊より左に折て舟の見山の方に向ふ東北
方に湊く連なりて大なる湊をなし續いて其湊の切戸より東
海を見るにこそ大なる湊より外にあり湊く我舟此より後に
く小さうして南に輪り小さき切戸より数々の濱をぬけて深かりす
家のさまかくて紙屋などよく又芝居桟の門を見るに宮ごと
し甚傍聴ち大なりぞして急くの船あり多くは皆三艘て

嶋の名は寸地蔵嶋烏帽子嶋などはことによく似たるもあり

筆捨嶋　沖唐戸嶋　松の嶋　水嶋
安犬嶋　鶯嶋　親子嶋　尾形嶋
二子嶋　腰かけ嶋　杣嶋　皷嶋
太皷嶋　青海嶋　汐干嶋　松ヶ浦嶋
掛かけ嶋　旗ヶ嶋　内裡嶋　后嶋
都嶋　二王嶋　塩焼嶋　物見嶋
玉水嶋　柵嶋　箕輪嶋　鐙嶋
飛嶋　化粧嶋　鞍懸嶋　あふご嶋
貝の嶋　伊勢嶋　小町嶋　毘沙門嶋

大黒嶋　夷嶋　姉ヶ嶋　雄嶋

旭嶋　翁嶋　子英嶋　経の嶋

松樹形状色〳〵の嶋数多して数へしるやでまづ千すゞに形容を

く四方の景色を見渡すごとすゝに心のいしむあくして十分の一す

ちゝしはえて八百八嶋あるといふ海に数百の嶋ありとか塩竈のう

千賀の浦から松嶋まで三里半の名所数しく海辺浅から

ざる三尺或八七八尺計ありとしく底まで明らかにのぞく嶋の名所

へ海かれし眺めうといはんかたなき波立奉りし以て此嶋々の松皆赤

色にして枝葉下に垂れ松のごとし故に是を紫色艶なるし

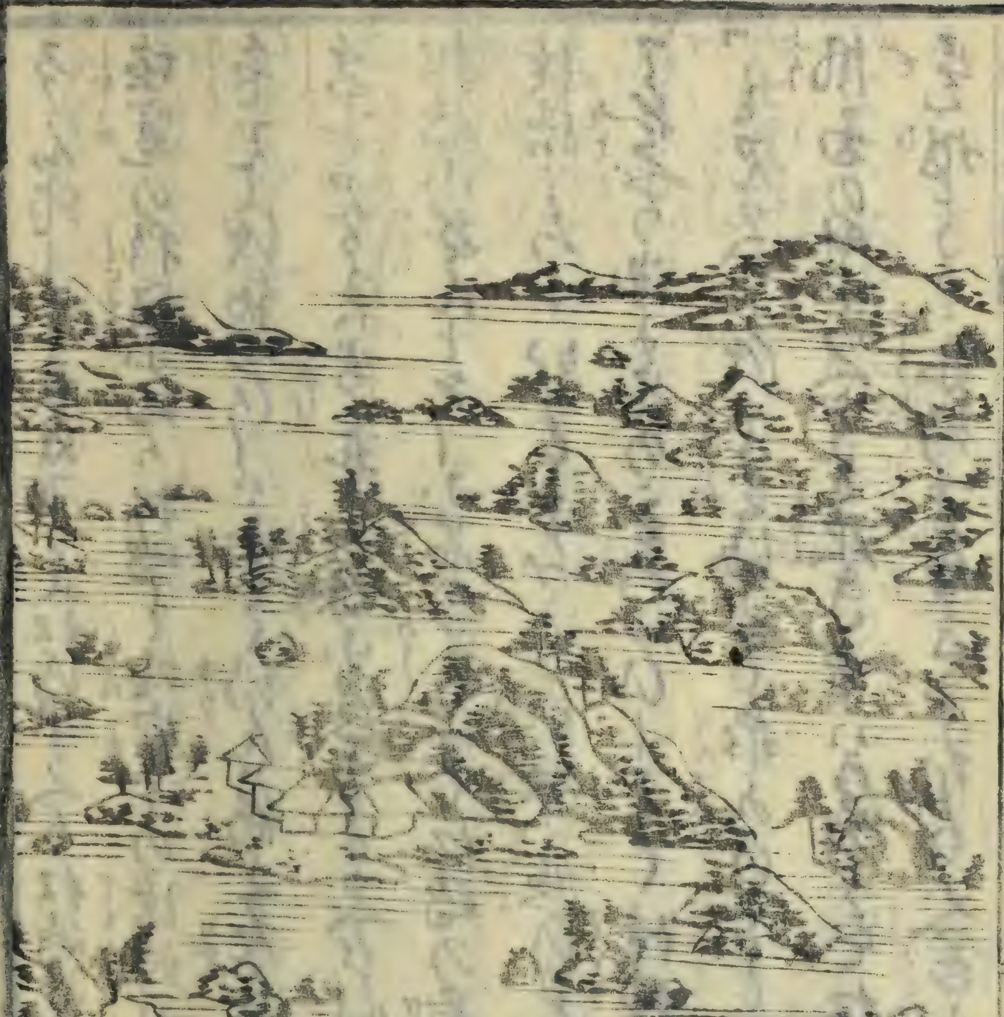
て穂りしず相手我擢嶋に付きて上らんとすに雄嶋頃見え近付嶋

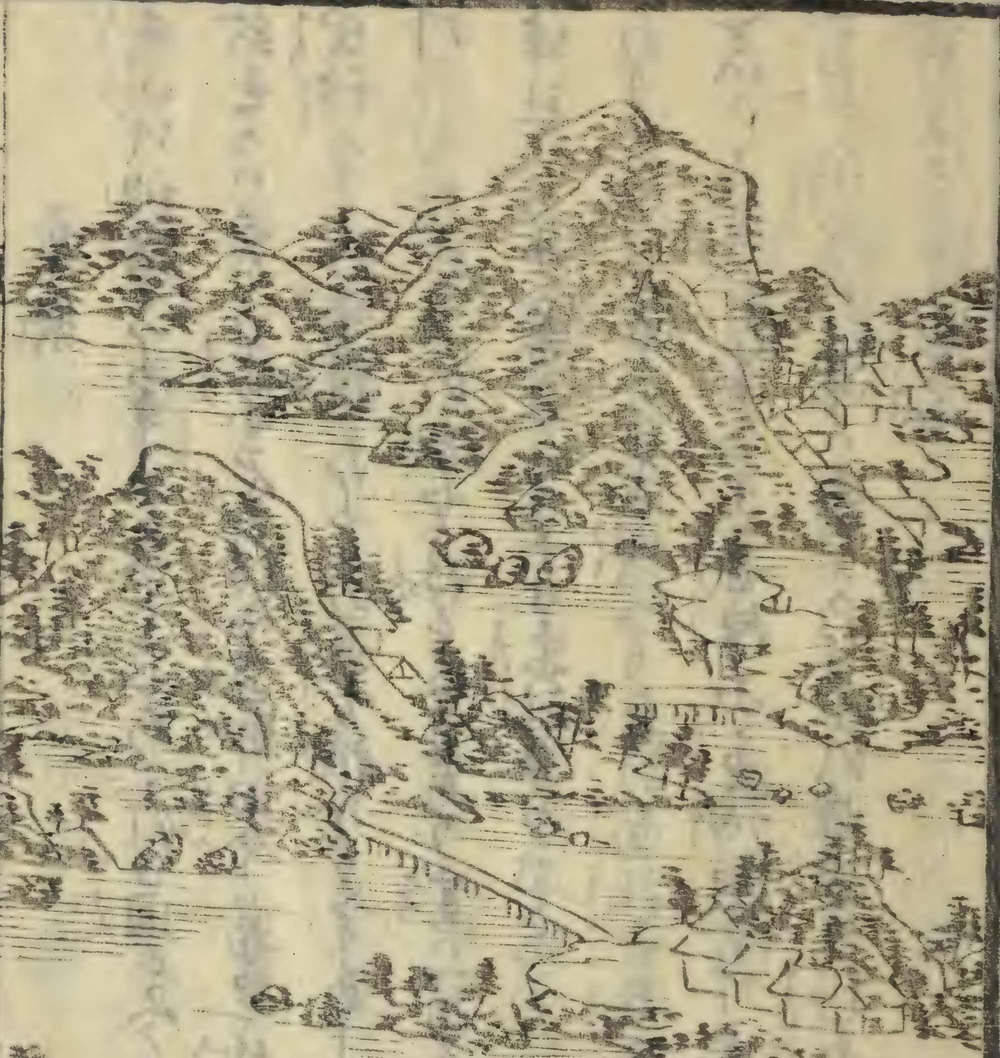
兀菴禅師の筆跡の跡とて堂宇今に連なりつる橋の額あり
或云文字に顕れる碑ありて元ノ僧寧一山鎌倉建長寺に住持
せし時兀佛禅師の為に書るる碑にして字體ハ写きて甚封
じて文字見しつてわかるし世の人石碑をもつて称ずる石碑なり
ここが此碑ある野中に芭蕉の翁もかつ於の時に詠吟し流の碑
台の碑或ハ路人の花碑に添て持来るに此佳景に對すべき
作ふ有の名を見えて切経通見ゆるとかんなりの橋は渡へた
の橋に於て人文一字書こる橋として松橋に添ふ今松橋と名
付る和ハ鎌倉にて町家すまの並べる多くハ皆旅籠にて松橋
の所耕地の花おれ農人すまめれ又此地ハ瑞雲寺の下にて

殺生禁制のさかひハ法擁入者すもあしぞ其他の街路もあらら
けしきハ島氣まあしびなくさハ只松嶋の景色絶勝の人
械宿して済世とする事へ瑞巌寺ハ町の西北にあり禅宗
にして大地也開山ハ世に名ある文真壁平四郎入道なるよし松
嶋の町よりハ景色見えざるし景色ハ只舟行の多き相違なり
但当所の人のいひしにハ松嶋に於て景ハ富山に登るべし
松嶋の景ハ富山より望むにしかず富山ハ松嶋の
東北にあたりて道凡十丁のぼりて富山と云ハ観音の霊場
にして田村将軍の開山なりしとぞ麓より十丁ばかりもあり
とくさしきとおもしろし中にも一の高き山の絶頂の高き所に登る

山大仰寺といふ寺あり此寺の書院の庭より東南の方を
見れバ松嶋の全景一嶋の中に備へ大徳東西弐三里に亘り
六七里計とも見えて八百八嶋連れる風景絵にも書ぬ西湖の
景にはなはだしく遙に眼のおよぶかぎりは東洋限りもなく滞に
まづ中にも第一の風景画紙にも書つくすべきにあらずば人ありて松
嶋の絶景なりとむかしより云ひ伝へもあり青藻にして画図のぞミ難き
名にいひあらそひし全景みなそに天下とならびなくして名勝の地也
ざる事も尤なり此松嶋の風景は冷なるべきものゝ又さ
順よろしからず寒き一日遊びなる一生ともおもへたき心地するも見ず
今里余の絶の旅さてあるべきにあらずしやれ覗しと人に語

ろ〳〵絶して青波に浮ぶ又松嶋より陸地と隔たる
塩竈の杉坂に路より松嶋と塩竈との陸路ハ山に隔たれて遠
色ひとへ没秘しハ舟にて行んハ海も荒くも有べし陸に学
多くの人はたいてい舟にて行ぬ時ふしてかへりし既に陸路より
松嶋に於んとする小宿の主語く松嶋の景ハ舟よりにあらで
陸路よりしかるをまげて観に添ひ見よといふにあらず余其
てかべり渡す宿の主ハいひしごとく陸路にして八景悉く
つくし見るべし況や海上も舟人のごとくゆかしいハいかならむ
風雨の時といへども危き事ハなかるべしぞ松嶋にあらずとも
是也とも舟行すべきさまなり又富山に登るべきことくえ





舞楽

我邦ハ神國といふ事ゆゑなきにあらず世間すべての事古風
残るもの多くハ京よりも辺鄙田舎ハ猶更質朴にして其
民俗むかしの祭禮とかはりの最古雅なる事多し越後國糸魚
川ハ城地にして一の宮と称する社あり是ハ一の宮あれバ天
津社といふ毎年二月十日祭礼ありて其日ハ稚児の舞といふあ
り是ハ往古より伝ふる古楽なりと舞の面抔古拙多く笙笛太鼓
とりてけあそびて更に是を音律に合拍子に計まし辺鄙の事
二百年も聞たる舞ハ必ずしも雅楽の義あり例年十二曲
舞奏す。二ニ曲名

振鉾　小児四人舞

按摩　小児面舞

雞冠　小児四人舞

抜頭　大人壱人面舞

破魔弓　小児四人舞

兒納曽利　小児二人面舞

能抜頭　大人壱人面舞

花籠　小児四人舞

大納曽利　大人弐人舞

太平楽　小児四人舞

大人も人輩

退出猿王

小児ハ大抵十二四五計の者を撰ひ集め大人とし例年露見して家
老等を一順とあゝう天満社の拝殿にて毎月相寄合をてもち白
事なる上手の手合稽古して後まじへにて書ろう安ひ場へあます々と
律儀に出る者も多々の心ふりさ古雅なる事なし何ものは
ち鳥の事するやと所の人々加藤しふれてならふ大人ふし
三四百余年前断絶せしに此あかての老若まち人雅の
手代男又匠なる中興せしかハ三都の地繁華の中の
昔々の興衰かゝりて一旗に花街柳巷のその手の事に梅さし此新
奇の事にそうゆゑ大内のおかみは古雅よりも大に婦人是すの

雑札と好古の者見まほしくぞ覚えし

漢文帝

奥州二本松辺より白川へ来るあたりの駅々民家の戸口に漢の孝文皇帝守護広と板行したる紙の札を張おける門に疫病除札くるしからぬ事を重じて此辺にてあたりの家々と見ゆる所なきもあまりあれども十軒目廿軒目程にハ必す此札を張て有近寄りて此札ハ何方の社より出す物やと問しかば日光山より例年神主くばり来るといへども此ハ何と云社なるやしらずと百姓の老人にて答へる所のハ志たしかにいふ人なし此事を文帝ハ祀るものや社ハ何と名付けたる村の氏神なるや

やゆう田かりく覚えてし祭るあるもる事ハ我が浄きせ家とともハ人
きれや何ゆえをぞ此文帝ハ唐土まで七世のうまの中に三
王以後此聖天子とる呼ぶものハ仁慈深き君なれバ彼のはる一
し姓にたをひ祀るべし我日本にまて勧請して民家の戸
戸に身ろ札を張る事仁徳の宵頼とする成るべし又勢州らどん
藤原し何色の代すくや民家の戸ごとに細川越中守やし
かき札を出さく身札とすしはちるゆゑを戸にて細川侯ハ当国時の
大名なるが徒ぞと此を武政の賭をもつる事既に日本国中にし
えらく其名此書く身札とて

戸隠山

戸がくし山ハ信濃国の北の方に在りて越後にちかき方なり
信州八景伴山なぞ多く連山波濤のごとくなるに此戸隠山ハ甚
嶮岨にして峯々遥かにそびえて生駒山をのぞむがごとくなる
山なり手力雄命を祭るといふ天照太神天の岩戸に
こもりませ給ひける時諸神集りて神楽を奏し給へ
されハ諸神岩戸をおし開きのぞみて天下のひかりを
のぞみ手力雄命岩戸の戸を引放ち投捨給へし此戸隠
山ハ其投捨られたる戸落て戸隠しなる也といふ是をもてかくれ
付たるとぞ世俗のいひ伝へありまた此山に大なる洞穴あり
この穴の中に大蛇あり九頭龍権現と崇て此山の地主の

神なりとて頭九ツある龍にて神変不思議の霊物なりとぞ社人毎月穴の中に神供を備へて其まゝうしろをも見ずして退き出る也翌日ハ其神供の器一ツも残らず無ク也おしなべて此火のたぐひなれハ右倉ハ暫して中て食しぬハずと也又云梨ハ好ものゆゑ誰にても願ある人ハ梨を穴の辺へ入てて祈念しけるにある夜に穴の中にて梨を喰ふ音すゆへ人皆驚きて眼をさましぬ翌朝て見れハ悉くなかりしは諸の願望叶ハずといふ事なし上古ゟても梨を捧て虫喰歯の痛を治せんと立願する人あるを言なるべし奇効ありとぞ云〔?〕孔雀樓文集の中にも此事をのせて記

出ありてある事代主命と信州諏訪のかみさま出雲にて
奇然探りて且文権現に贄を献じたるのひしめかし時宇都宮
のはすては登山をはなれぬ者ある故世人身命を信ずることのよ
ありまたこゝに地も人民の食する食物或ハ肉をあくと忠て食
する神社ありしかれどもこの伝ふるに曰く八武州鴻巣明神
の由来のことき事にて毒蛇悪獣神明の宮殿にある在て
食て命をもとめ人智をもとめ又善悪の感應ありて後ハ
毒蛇悪獣の災害をなす事今にても人食をもとめ食する神社ある
祈とおこなふ社のほかに八すべてなくきくなるに九頭龍権
現のことき八奇の奇なるものなり

大魚

北狄の波羅泥亜の北きクルウンランドなといふ国の海にハ鯨
鰐魚ことき中ものハかく魚ハ大なるありて蛮人の説を聞ける
けるハ世てまてらし　かくかる種ありといふ毎金とよふものあ
里程しく東海の人西岸よくに東蝦夷の海にわたすとい
ふ魚あり二まろき二里三里すもおよぶもまはものに三魚の全
身戦見るゆる人ハすしまハ此魚南に出て秋ならハ北へ洄ろ蝦
夷の猟師ハ魚を出遅年なりともこの魚にてる時ハ海上雷
のごとくなる者て風をふ波浪起り鯨東西に逃ちるか
くの如くなる時ハすハ大きなる事ありとて猟師ら色

あくれ逆浪をたて船を海に溺するといへる大魚なるべく
つも出来するべくし是れさなの脊中尾鰭などのかしらで
みゆるなれども二十尋三十尋の鯨を呑む鯨の鰭で天をこ
とくなる此魚此色ハ鯨を東西に逆まへるなり蝦に東蝦夷
の海ハ即日本奥州の東海にて東の方ハ数万里の方りに空
なく世界第一の大海なれバかくのごとき大魚も生ずるなる
べし二里三里又四里にもおよぶ大魚あるとハ信じがたきものなれし
どもまたあるまじとハいふべからず其陸土なきハ海に遠き國に生る
昔の文人学者なども二十尋三十尋の鯨も東海西海にある事を識
いかに怪しとて不思議とおもひしなれどもその海に生し住るものなく

日本とハ四方洋海をとりまきて東西南北に見えしとぞ。らしく飾あ
るのくて惺しひろげしもハ数万里手開さたる大海にハ
かくへんの大魚あるをも惺しめへらで荘子の鯤鵬をばハ
寓言なく荘子と実にありとハいひれど鄒衍が赤縣神州の
外さらの九ッ有といひしも虚妄の空説なりとかや
今日本の地を見えづと見れバ唐土までのくらき五十と二十とあわせて
九ツならバ数多しといはれざる所すハ鯢をもつてすゐ足
ら度貴ぶ文趣開らけし御代のまゝ遠くあらざるへ
なり

塔影

信州諏訪明神にも世俗に七不思議ありといふ。其七ふしぎの其
一に上諏訪の塔の軒下に諏訪明神の拝殿うつれりといふ。余其
後諏訪に至りて見しに、ふしぎもなくて、ゆゑもなき虚説なりと思
ひ居しが、此度天明五年乙巳秋、京都東寺の塔の軒に大宮の
民家のうつれる事ありて、洛中洛外ひゞきわたりしかば、関東四国の人までもひとしく群りく
みしに、丹羽五左衛門といふ百姓の家なりければ、しばしのほどに此事はやりしに
西隣の甚助といふもの嬉しき事に思ひて、余の事なく新しく家を造りて
ことごとく皆とひ来りて見物の人の入るべきやうに新しく垣を結ひ、其中に入りて見せしに
人ゝ大勢見物に来りけり。見物の人を迷惑がりしかど、余儀なくされ
親方にはからひて入口の戸を閉ぢ、見物の人を入れず

ところ内を暗くせしに入合の戸より隙〱の穴より七八分計なる
より塔の影入りて倒にうつりたる障子にうつれる影を凡三尺計
ありて九輪寶鐸等まで纎しくしてさへ明白に見ゆ又一かは戸
板戸指にて穴を明置しをハ塔影短くにうつして明白に斜
に向ふをハ塔の影大にして縦なりにうつるハ弐尺計にうつる
こゝに奇なる事目を驚せり晴雨ともにかくのごとく
うつれるといふ但晴天の日朝日塔を照して明らかなる時ハ
此影にうつれる影も亦甚明也と云此寺にハ塔より東の宝にも
ある也西の方に朝日照す時に反て東の方此図に影入ると奇妙
のことく塵土する塔影の穴より刺入る事ハ近よりて人の手と

すなはちなり輟耕録夢渓筆談にもあるを論じ置たり
の塔影と見てあるべくも語譜の塔影のうつるを虚言なり
ましこゝろみべからずなり

東遊記後編巻之四

一七

東遊記後編巻之五

南谿子著

手取川の風雪

極月十二日雪降しに加賀国小松の城下を発立て安宅篠原
などいふ所を過て是ハ海道より少し浜手にありて篠原ハ今の
松原にて彼斎藤実盛が討死の事なども思ひ出けり安宅にてハ謡
と行ところの安宅をも過なと口ずさみて来る程に雪いよ〳〵降
しきりに風ますます烈しく粟生といふ所へ来りける小宅善得にハ志
らうハかの鉢木の佐野が名誉の事などおもひ出せり
小粟生と此駅の間に手取川といふ大河ありて川原幅
壱里ほどの中に七筋八筋の川流れて下り此雪吹にハ川原ハ越て

雅し逗留したりしとぞ。むかしあしど年ざこぼるゝ頃之梅月の
るなも八日ゝ雪ハ消へしいつれども山ふ雪消すべき嶮ざさことて行程
の手るわらん勇気を振ひて川ふ至りて越さぞやらべきとおもひわ
なりりて竪飯丈夫人ふ食し身ふは鎧合羽襷巻合羽ネ合羽とも
三重まで着し摂川原ふおもむるふ風の烈しさはるかざのことく雪
ハ飛かて矢のごとくおつるふ遅拾ふ降り三重の合羽も紐切
神復もて不動るの尖るのことく眩くふ霰ひてよう目を閉
屈しても息をはざわくれどもさどる勇気振ひて七歩八歩の川
とうし横さりふ進みて吉利の顔ぞ凡人ふ色失りて今も死
すべく凡人ゆえ家是此辛ふて千辛万苦して既ふ川原を

八分斗をまつ様に余を何と申そ登の人壊に為りて候へとも
御さりまする香を勤きりくして養躰を服くまずくとかけて非常に
蕎へんとへ斗の人へとても声出し豈形の様ひをも何と申も怪しからす
養躰猶まきうし此より抱き相を成同へとも志のとし会ふ事
何とり候へ養躰を猶まさま色しと介抱しつく川原のつさに
有る十躰斗わの人る藥家にすうしく抱きかかりて入ゆうう
こゝハコロバといふ小さころなり家のあるし余の待様みて
旅の人又雪深にて倒されしひんみやいわき當て解て先にあずら
へしとて先を松無葉にて焼して其躰小宿して小手伏ひ余を
介抱をこふ附服を召る中にかへりしのいふ心して

足に拵ありしかるに冷水を以手足を洗ひ床に坐し凍人の手を握ひあたゝむれ
ばますく鬱気をさらし漸々に来りて挹気を発し火気にてわざ
あたゝめると猶更悪しく痛ありて雑炊を食さしむ其時汁にて
ありしかし手足の傷き気を温めすしく持に精神を慎むへし先人の教
まじきよし筱つひらかに新とかし泰然として主のいかする
甘川辺にては結の人毎年寒気のはし雪中に倒るゝこともあり
今日も寺にすみなく目をたしかにせしにより返留する人三百余人もあり
一月も寒気にあひて手足を痛しむ事多くすて厚き謝礼状のくだ
甘次の町の柏野といふ駅に泊りけるに服薬せしに方療の事に
復しけるに二日餘逗留保養して後金澤に入たるが秘て

此の害に逢て命を殞しぬる人甚多かりしとぞ我按ニまり神の猛ハ甚だ危きものにてハあれどもまた彼ハ無禮にして余ハ既に死せんとせり余ハ幸に喉んで氣ハ深剛になれども天稟虚弱の身なれバ劇烈なる事に堪ることあたハず既に危く氣をかし怯なるも多し身体充実して丈夫なるハ二年の旅中にて恙無くしてありしこの危険様々誠に此ハ南方の人の信しがたきものなりき

床下の聲

越前国鯖江の近辺新庄村に百姓の家の床下にて何ともいふありて夜中にて人のいふごとの聲を為す家内の男女大に驚き

急に床板を引めくり見れども何の事も見えず又床をふさぎ人々
おもふ時ハ何の事もなく床の下より口三線す後にハ村中の若
達とあつまり若き者共毎夜大勢来り集り色々の事をいふ
に皆々床の下にて口三線を上るものハ古狸なるべし
といへハ狸にてあらずといふ然らバ狐なるべしといふは狐にも
あらずといふ猫なりといふにもあらずといふ鼬河太郎獺蝙蝠
など色々の名代あれど何も同じくいはざるもあれど
中々に答ざるハおのれハ何ぞ怪なるべしといひしに何か化物かさ
怪なりといふそれより何ぞ怪化物と異名して世上へ
大評判に成ありけれバ此事城下にて聞えしかバ奇怪の事なりとて

吟味の役人大勢来り一夜此家に居て試るに何の妖もなし
役人帰てハ其夜ハ又妖ありて以前の如しといふ其後も
毎度役人来りしかど其来る夜もあれば来ざる夜もありて定まらず故
にせんかたなくて其まゝに打捨置しも已に月日ふりして今は
何の妖もなく怪事ハ止まりて何の所為といふことも知
をいりして世にありといふことも無くおのつから治りぬ

飛根の滝音

出羽国秋田城の東辺既に津軽地にちかき所に露熊飛根など
といふ所あり此辺津軽境界にあらずして山の深あり川の流れも
頗る要害の地形なり故に此所も谷にて流るゝ水して或ハ

川と云所に池又或ハ古山城あるし或ハ数里一帯に見わたりしほどまで
皆山の上を平にして古城の跡歴然と傳まり其跡ちどもも所の
城跡ハ殊にて地面広大にして十町或ハ廿町に連なり或ハ中
に一つ山あるく四面ハ山の外堤のごとく繞りて或ハ山連りて屈曲
して所々に通路の道を開きあるも山ハ何れも背を平にす
く人作にて山を截付すかしたるものゝ又堀の外の溝ハあら
をはかりて何人の城跡なりと云ふ事を知るものなし又古書
傳記なとをはかりにかく広大の城郭を構へ住しける人とも
うそ国史紀なとにも上古蝦夷を征し鎮府を置れし事もあれと
見えたれ何すらもそこしく人力を費したるハ豊臣太閤なとの手

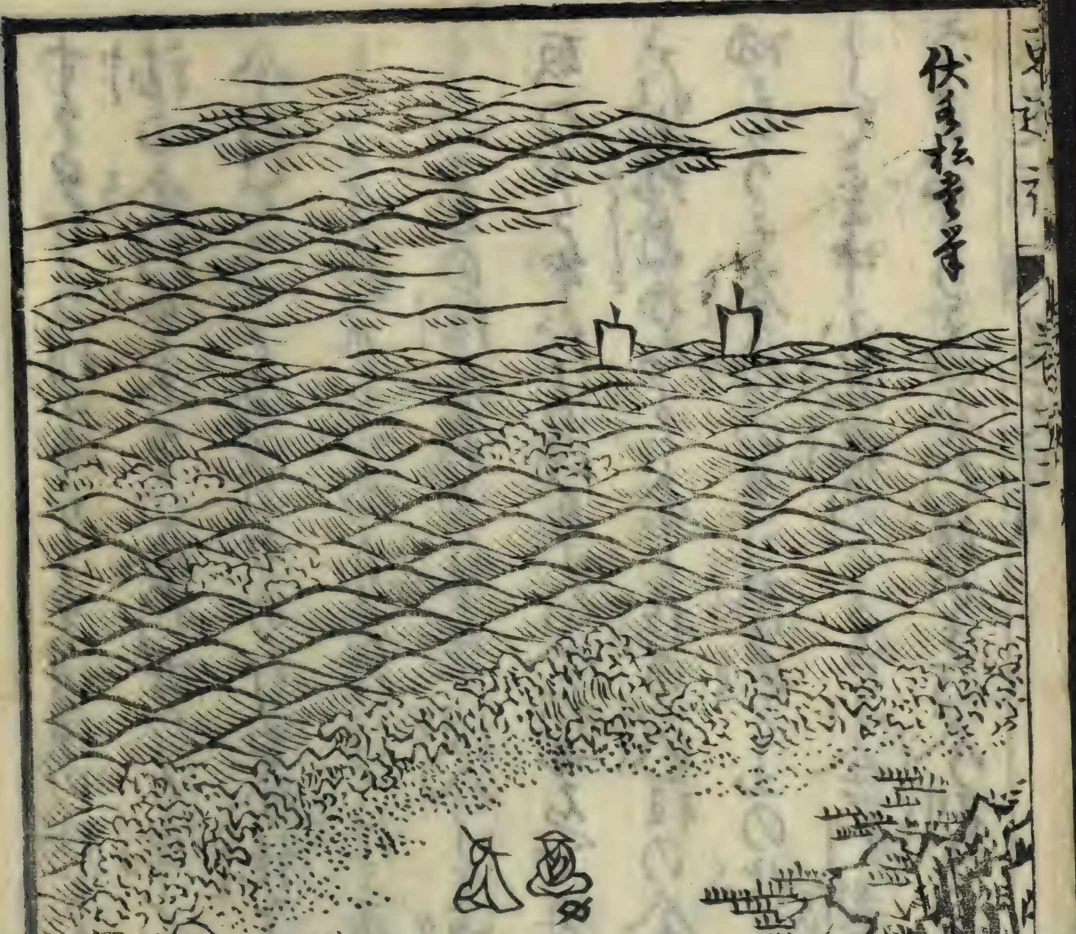
倍なりと或人一日予に古今いくさくろう人にて攻守の格子より上古の世
蛮夷（げんい）の侵たる時彼人に格別（かくべつ）の豪傑（がうけつ）ありてかくのごとくなること
なきにしもあらざれど事の形をもて博物（はくぶつ）の人に見をいはせる所とおもはるゝ
らんや見る人の世話を笹（ささ）へしげきを（しじつ）まするそうろう文は此理（つゞ）にて
殺（いろ）雲の山の中に城跡ありて見るに尾根をなすものゝごとく岸聳え
前ハ大河をひかへ左右ハ矢倉（やぐら）の跡武ハ城門（しやうもん）の跡をなす巌（がんえん）とおぼしき所見え
山城跡（しろあと）と仰ぐの石垣さ古城（こじやう）の形様（おとくず）より格別（かくべつ）に大いなれども
尾根のごとく数（す）里に連（つら）なる四方にくびこまる岩穴あれども尾
根にくりぬき也ハ十余ケ一丈に足らず此色（いろ）の図（ちき）ハ江（えんひく）人の城跡（しろあと）
まやしれの岩に見るに足をにのへしいまるをはしむ智者をも迷

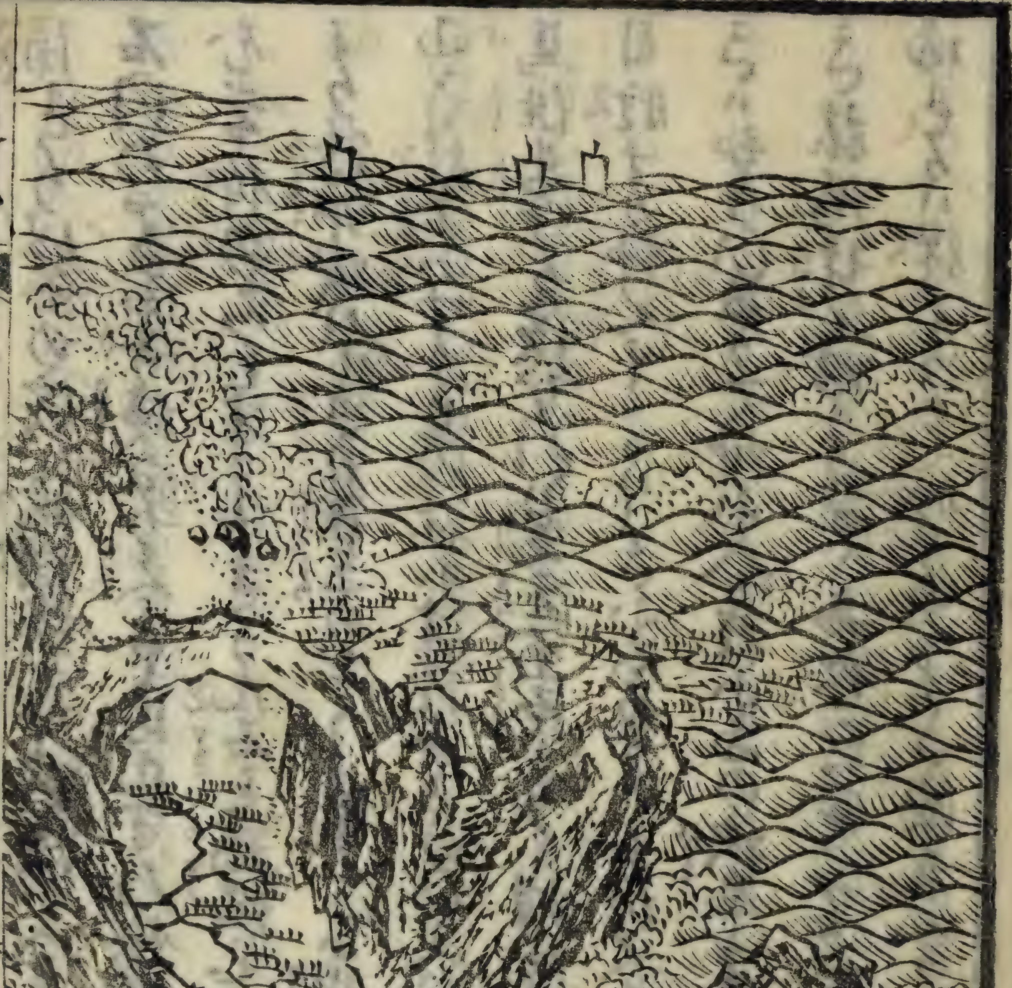
所の人も只城址と計覚えける。今に土中より古刀儔等種々の兵器を堀出す事多しとかや。かゝれば邊陲に三四百年の五六百年にいとさびしき事代文華無き故なりしハ書傳にのする人も無くありける惜き事なりし

舎利濱

奥州外ヶ濱に小ホロヅキといふ所あり。此海邊に舎利濱あり。小石濱なるが其中に舎利まじれり。色も白きあり飴色なるあり。大さ豆のごとく米粒のごとく明徹滑澤にて愛すべし。此辺を通りし日は天氣殊に朗なりしかバ、濱邊に座して舎利石をひろひ楽しみ。回國修行の者杯は此舎利石をひろひ大に悦

するなりけりすべて奇なるものハ此濱の礒ちかく海中に磨(?)て出す
越(?)の舎利母石あり此舎利母石より常に舎利を産し出す
舎利とて此濱に奇なる物あり古今絶えず此所に舎利多し
とくニも舎利母石水面より舎利種(?)浮(?)く流れ居て濱邊よりハ見えざりし
しが此邊の漁父に頼めバ海底に没入して玄猪(?)まで手拾(?)ら
取あぐる事なり此所にて舎利母石を得る事ハ頗る難し
されど珊瑚樹(?)程のもの指の爪程の舎利母石あるにて
埋もりある舎種(?)の色ハ蒼黒(?)く玉の化したるもののごとくに
して其中に米粒のごとき小舎利輻湊(?)して誠に奇あり
さらなり又此舎利濱のさきニ今別といふ所あり此所二里ほ


伏見松雲峯



隔もろ世界の浜にて瑪瑙浜といふ此浜に入る前後に自然の
石門あり是を壽境門といへり内凡て尽く瑪瑙石の浜なり
其常体のものとすまじき凡石と瑪瑙とも大さ大抵碁の程
より鶏卵或ハ小きハ蚕豆のごとし皆く玉明徹にして京都
にて流布するものハ世に津軽石といひ又ハ寶石ともいふ人
馬往来する浜なれバ足元に玉石ありて殊に日光にきらめきて
目眩する計にきらめりしさまに驚て見ありくも覚えし浜程よ
ころハ拾ひ取りて袖に入る程に雨の後風ふる計にて行けども長
き旅路を携へ帰り難く無数にて思ひ〳〵人に與へ京まで携
へ帰るハ僅なるかのごとき浜まて土にめづらしけれバ

守る人も嚴敷門戸を締てみだりに小児の手たりとも流さす
しきことかなる人を驚き邊地なれハ道行人の取に任せ流さる人禁
ずる者すらなしつらしきこと也けり

洞山

出羽国秋田領城下より東南の方へ道行十八里の所に
阿仁といふ所あり此村の洞山あり此山より鉛并銅を堀
出すなり堀入る穴の中をマブとも又シキナイともいふ奥深く堀入る所へ
入る者皆さゞいの殻に油をいれ燈をともし入るなり其堀数十町奥深く
堀入り世界の風も通りさる所なれバ始めハ燈火大きなれども
きゆる事なし燈火大きゆへ人も亦呼吸の事息たらずちふ

穢らく死せる人何国にも大き中る所に多きハ急に逃得るよしなく
て此事我等常に不審に思ふ事にして人の死生物の生滅
の妙を知べし。余も此穴の中に入て試んと欲すれども危険
殊に猪十八里其往来の人君としいふとも無く強き穴の中に金
石の毒気ありて他郷の人常に此にて氣を別さるるハ毒気にあたり
死する者多しといひ又其口の傍に割中く旅人多くハみなかかる洞
のあたり徘徊する者許さざれハ無益とて又右のごとく奥
深く入れハ死すれども又奥深く洞多くして入らで叶ざる所
ある穴の小口なる下に樋にて伏せ風気廻る中にして幾十丁
ゆくも入るべき是にて風廻しといふ、かくのごとくして入れハ何程

入りくし烟火の中なりしゆへ人々も死せるものありしとぞ是亦あはれ
なる事なりしとぞ是は阿仁の山中より出る所の宝緑青孔雀石等を産
す銭屋業のものは様々の諸品を集め一イケ様も其形大なるを
の名産なり

廣徳寺の門

東都下谷に廣徳寺とて大なる禅院にて此門格別に大なる
門なりわけて文照院の霊を移しけるともいへりにてよりて名高き
東都の人々ことをとはしばらく廣徳寺の門といひ余もみ
てさらに京都妙心寺の三門に比するに八幡宮寺の
ちかくの門より是程の門はあまたあるへし此両三門と聞ふしまの大さなれ

假名といふを始め給ひし人の書し給ひ珍重なる物と見へしに似
門の手沢載られたる珍寳の事なりとも今ハ又古めかしき書写にて見えし
孫く年中東叡山一品法親王の日光の草紙多く諸ゝなるせる
ゆゑく廣徳寺の墓とてあるその寺ハ御輿の間より此寺の
門を見咎めし供奉の人を召し此寺の名を問せ給ふにとく
啓しぬれば御山の側にありし路傍なりけりとて廣徳
寺の大門ハ遠く西に後ろへ入てハかりを通しせ候べし吾山
出入をも大工どもにたのみし御めぐみに浴し是々開きしを
人の大工中より機を得て此寺のみ往時此門建立し
大工の成就の後はすぐく見るに此門の並ぶ幅を揃へしとくハ

さて人傳しと云ふ邑全く神よ考へ定むべきふ今まよせんうく
寺し浅海し居まるが住山の諸(?)侍代々し先大ふの極識
乃ひ同職の工匠まて倍さん雅(?)さる事よく云ふ武門の見(?)識ての
み孫しめ色ハ独り我(?)ふのミ稀(?)見て日月代る/\ふ武臣(?)代
門華(?)代ミらつとさて文ミ顧(?)色ハ龍(?)角ミ及べ絶し/\ふるふ営(?)ねって
者ぞ守すしま訪ひう進(?)すらん色ミ大工と及して武人遵(?)ふ
て未う代大門の事代盡しくゆ家ハ天識ふ江戸(?)な面の位
業ふ云ふ由り此門の大さふ無って八そのさま定とぞ謡り居うハ
いつふし謡う偽(?)造りし大工肝ふ雅(?)しそ捆(?)ハ他人の目しとく
及ぼめう事ふて脊中ふ汗しふ聯(?)擺(?)し君ふ陥りて居ても

猪しきてんの中に快からざれはひよ病とすなり既に乱さんとして
志くのよし弟子に語り乱暴も弥々事多なりしとひて語り
ぬとちとて色ゆゑ大王仲哀を由てし語りの親類として語り侍へ
中宮え無八年信と己も如事も語りしき他の衆八堂堂蔵
八幡宮常行所よりあらまきとを由をしとあるへき者をつけては
始にかくと聞へしかは法親王宮のもとにまいりてきこえけるよ
吾とて宗あゆく為つゞきにをらしとい果てして志りと寺の諸堂
守はかゑるもとをあらんとなれは八音音楽の大内裏道にら
まる時朱雀の東小羅城門と建らるゝ一代柏原院成る
ありてここ門をえ年ゝ必風になあるそ被損あるへし柱をたて

此切は悪しよと勅定ありて端しきの寸法此門造る畢て遷都を
く成りく文御説して朕初悪為尺をく吉尺切まといふておりまま尺
る寸切りますべりしとて今寸切べしるく尺申すと作るれ八大工等ら今
恐怖してやゝ此門なかの門の寸ふ違合といへと吉尺切まとの勅
定なれば作のまゝに切しひて八寸に低くなりまして尺よりに高
やうなる事をききて比へかゝる離主家の尋りに尺て寸尺八尺吉し
かくなりひく五寸代切りくひて今寸と作のなれハ神に御説したりへる
にあらば五寸居しく切りはかえて御自の積ふ恩感しまうりぬとや
よりて帝今切りハ遷都の寓まとありげなれど甚道そあるべし
傍ら聞まても聞きさハ例なく事もなるのごとく勅定ありぬ

太宰府ハうしろく隣く遠りハ不接文章切くひ海ハちふ不尽きて
ひりしをけり細敷ろうのは土の世ふあらこ段だうら略例さまた
るとて残されし門閣の名所尽寺跡等ふるかくのこし今も都を
南ふ海を受け山嶽遠く東西も接平原のまうして風光あるうち
るの徳あり且森木くまくろ鬱蒼をすの名跡も多く甍を連ね
麓とすなハ言ハ者多く失火ありて附ふ其ひかくしてたたかつと
むべく後より彼ますつきさき人を嘱して建てる風の重が避けたり
の名代近くこそく五地よ無しく太宰の旧跡と見へけるゆく
いう今日完智の君の跡こうすすきろひしふなる彼大工記して其ゆ
死ちる事も眼前の嬉音日い泥て太刹の深失して志しく

恨しく八我身をうちなげく涙を流して早くして天然と歎八
さりしかくてこそ作りかへし果しく此書門人に与へて我丈
の為に述べをしるし置きて永く識すとも

氣候

凡そ此書ハ我が里隔もろしといへども日の行道に遠けれバ氣
候も径ひとし西北と遠へ八幾十度なる寒暖も大概ハ推
量のなる便ありて居ながら其所々の氣候を知るべし又高山の向
背によりて寒暖の変もあるべし先日本にて論ずれバ日本ハ
四の海にして甚高山の絶頂といふハ信濃国なるべしより
四方へ其土地の南よりの南ふのほめり南面北面とゆく

の向きくあり薩摩大隅日向の地ハ専東ニあつて最暖氣の
国之て寒氣の地ハ三方開ニよりて全く東を受て西北をふせく
由ゑ彼地いかなる山深谷といへども三冬ニ雪ふりて寒さ
る事無し又人家ニ大庭といふものありて是皆花樹中の花園
ろ本不及先冬ハ天氣常ニ晴朗ニして風雨ハ稀ニして北西風も
多くも宜しきも無く蜘蛛蚊虻蛇蝮の類四時ともニ草木も是ニ
庭ニ蘇鐵蘭の類も自然生の山ニありて人家の庭ニもうへ置く
植つくしよし好事家も桜ニ多くあり咲花あり梅も露地ニ
多くあつて花咲く草も花も三盆ニ見ゆるものハ稀なる事多く
相桐龍眼肉皆實のる松竹ニも栄ふ少ナキハ是に異なりてある

山深谷ニ至り雪消えみれハ氷柱垂り霜おそろしく水晶簾の
ごとく氷厚く堅くしてとざせるのミ大河も流をとゞめ皆
凍りて車馬水上を往来すれバ西土ニ足袋頭巾冬と春の二
季ハ去りがたくそれをすべからく火燵のそばをはなれず囲炉裏ニ大
火にして昼夜寒ニ火をたく又九十月のはじめより春三四月
のはじめまでハ毎日毎夜天気曇り雪ふらざれバ霰霙おほく北
風寒く常ニ烈しく吹して面をむくべからず是北流に林なきゆへ
其緑なく冬至あかし草木も皆色白く霜雪積もりて南方よ
りハ春おそし竹緑もなし松も又まれなり楊柳桃花も薔薇躑躅
梨李杏石榴枇杷も遅く咲て漸く一時ニ開く西土ニ皆四五月のはじめニ一様ニ花

咲する梅ハ紅葉ニあると花咲と一致して寒ニ花と一合ニ
寒国の梅ハ紅葉ニ落して花咲べき暖国の梅ハ紅葉なく花咲く
氣候の相違なくのごとく成しけ西国ニ北方凛烈の氣ニて
夜までも堅く東方ハ暖和の氣ニて夜までも世ならざる北方ハ
巖石堅剛なる故ニ山嶽なとして聳え見ゆ山ニ類して
海ニ深し越中立山の沖ニ当て海ニなり三百尋の深
ニ乃ぶ古までも熱し山なる所ハ其海甚深し東方ハ石もりなる
故ニ土地ニ骨無く山嶽なく聳ゆることあらぬ東国の平
なる山無く海まても深し地球の中ニて凡日本ニ相似なく
海深さも無き者なる世界万国の地理並論もる書ニ無し

日本の内にても南方の山ハ平穏にして嶮岨なく樹木茂りて土地
ゆたかにして人の気も剛柔の気遠かりて獣も北方ハ猛
悪の山多く雷霆のおそれも北方の山に慓悍の気ありて毒ある
者多し人の心のものハ北方の人ハ稀にして南方に和し又中都の地ハ四
時の気候正しく其色中和の気をうけて剛柔の偏なく
万物ともに備りて實に王者の治所なり

名山論

余幼より山水を好み他邦の人に逢へハ必名ある大川を問ふ皆
各々其国の山川を自讃して天下第一といふ予ハ信し難し
既に天下をめくりて名山を見て論ずるに其山のかたちの容

富士第一とし又能海すしきて次ハ加賀の白山なるべし其次ハ越中の立山甚次日向の霧島山肥前の雲仙嶽信濃の駒ヶ嶽出羽の鳥海山月山奥州の岩城山岩鷲山之是に次く豊前の英山肥後の阿蘇山同国久住山豊後の焼ヶ嶽薩摩の海門嶽信濃のたる峯美濃の恵那嶽御門嶽近江の伊吹山越後の妙高山信濃の戸隠山甲斐の地蔵嶽常陸の筑波山奥州の国山下野駒ヶ嶽等是に亜く猶論ずるに不足伯耆の大山上野の妙義山ハ余いまだ見ずとくす甚高く聳へ知らず出羽の羽黒山のごときハ高山なるよりハ霊山なるべし山ハ名に高し那の霊山及ひ伊豆の湯殿山も叡山より高く見えて見しと思ふ是ハ佛神霊地

のぼりし人に参詣の者多きによりて其名をきゝし山の嵩谷など
して険阻画のごとくなる越中立山の劔峯に積もおとらの
うち立山ハ此ある事十八里越後の人ハ富士よりも高しと云つたへき
よる越中に入りて初て立山を望むにおそるべき事にて見えし数百
丈くみしきに見る[illegible]也連峯参差としてその高さ[illegible]
遥に見えずいハ[illegible]程なる峯ありて劔峯も其一也[illegible]
と峯くまなくして連る波濤のごとく連る皆高山なりけり[illegible]
まるくハ[illegible]の[illegible]もなし遠く見るに何とも[illegible]
山とも称しがたき[illegible]ても[illegible]ハ
及ぶべき[illegible]白山ハ只大きなる峯にして根張も大き

ほか小呂嶋ありて白玉を散らせるがごとく見わたす目覚しき地
を又山の海辺のさハ鳥海山月山岩木山磐梯山焼山浅間
嶽あり皆富士山に似て一峯秀出画がけるがごとし又宮こ
双ありし薩摩の桜島山ハ蒼海の中に聳て離れて独立し
最嶮峻なる小日光叡山ハ山の色常に見し絶頂より白雲を蒸
るごとく壇ノ上に立登る者ハ青海の上に香爐を並てる
ごとし大概海内の名山是等に当るべし其山国の寺院ハ又別
に載あり今略す此下修中し西洋海とるのと

楸先

瑞東海ハ文龍いまごとしきす鶏る要利のまうして唐日本の

太昔のころ金銀米錢といふものもなく猿猴猺獢といふものゝごとく
し喰ひくらし居たりしが寇掠ありて鍬先といふ金鉄出て作りたる兜
の鍬形のやうなるものありけり此後蝦夷地周廻八百里といふ海中に捨に
し鍬先を持傳へたる是こそ家にあるといふ此鍬先に家神霊やどり
とく痘瘡氣盛ハ蝦夷の病ある時に是に祈請すれば忽ち不思議の奇特有て
恐しくも目るなり故に此鍬先を持傳へたる者ハ島中の者より
尊信して自然に其の頭の如くに敬ひ居りける然し此鍬先を
古き物にて我等百年のものともたがきを書物のみをいませて古き
傳来せしと見えハ何ぞの時の事にて何の用にかなしも掛たる者なれ
ども一説にハ源義経蝦夷地に渡り威を振ひ夷人を従へる歟し

くわの字ハ義経主従の兜の鍬形と今に伝へたるといへども猶
けらも余彼邊の人に問ヘバ小兜の鍬形よりハ大にして鉄に
て作りたる丈夫なる物といふ それハ兜に立べきものにハあらず 余
深く之を考ふるに日本神代の頃の耕作の具なるべし 聞
たる所と古の手にもちて田畑を耕せしものなるべし それよ
り後世に至りて人民次第に世智かしこく成り耕作もせはしく成
りしより便利なる為に考へ出して其具を小くす それは
本の柄を付て今の鍬となせしなるべし 今の鍬も本の柄
と鋤も鍬とハ耕作第一の具にして人民飲食
の根本となるものなれバ延角の神代の器ハ此論とよし

無き窮にして風俗よく蝦夷人のためにし、まことに自然に任せ〳〵と
知れども日本人の愛とするなく貴を拘し傍に従ひ世本
ミ孤斗計を以て蝦夷人へ仕つる故今にも家禄をも居るなり蝦夷地
ハ昔より田畑なく耕作をする事なければ無用なる鍬の事也蝦夷人へ仕ひ何と
いふ事も無き宝物として反つて今に伝り居る日本にハ耕作の為に一
用なる事ゆへ今の鍬のごとき便利なる物を考へ出して後ハ不便
利なる大昔の鍬先ハ皆遣ひ捨にして今のスき鍬となし
たる事ゆへ昔の鍬先ハ日本にハ一枚も残り居る事なければすべて蝦夷
人ハ日本人を神仏のごとくおそれたうとめる故古き鍬先をも
限らず日本の古き手拭等まで数百千年持伝へて宝物と

し居る也刀剣の具目貫鐔の類或は蒔絵の漆器なども秘蔵して宝物とす居る人是皆日本古代の細工物にて多くは蝦夷へ渡る所今は珍しく居るものの蝦夷人眼なれば是を称美して取りたる物なり又満州韃靼より渡り来たる物もあるべし日本より昔蝦夷地へ入る所今又異邦より来り日本にて重宝する事なり是等の類まで老人今は小銭又日本銭代の耕作の道をもなきの疑ひもあらず掛る夷人はいかにも窮して居れど実物として何をもいたさず或ハ人と争論し又は罪を犯し過ちありたる時宝物一品二品或ハ三品四品其罪の軽重によりて差出し与へてわびる事なりといふなり然れば実とする人

生をハ一命と賄ゆゑ身を保つ事すら生涯にかゝして変也
城愛するく三中にかの秋出まてハ積つくぞる気も蝦夷地よ義
新るく明白に生し気も又格別に霊妙ある寒暑の事より寒く北國
と称する家ハ三不の類なる郷ある種のある房に羅像よるまうに
八国ぞるなり

地氣

天下太平の氣ハ小ゆうして自をいよ今ハ交趾西安南那古に
遠境にしもの舶載に出て眺望をしハ希也有様の風景
て西ハ佐豆の岬まて目をて尺ほし気色面白き事ハ皆く
落して安ら晩居よりしハ不の老人傳に来りて四方山の翁隠

ありしに老人いひけるは扨も天地は不思議なるものなり某幼き
時よりも毎日に舞台の下に来り遊びしに其比は此舞台の下ま
で海すくなく浪打寄せて網を引き舟を浮べなどして面白かりしが
しらぬ間に陸地と成りて渚より松も生ひ出て今は景色変
ぜり見る迄海までは十丁計も隔たりぬといふ誠に舞台の遠ざかれ
るは似たりして海水を臨みて下る事すなはち下の方は海浜に
くれまひ海までは遥に隔たりしと覚しく陸なる金と覚しきの
附に播州高砂尾上に松ありて昔は海に小さき磯の
る所に在りし滄洲に陸の方に出ありといふ二三千年前とは大て
もくありとぞ是もの唐房州の地の理なるべしすべて此

至のはやうして衰ずるハ天下太平の瑞なりといふ宋朝の末葉
の末に邵康節先生客と洛陽の天津橋に杜鵑を聞て
惨然たり客其故を問に邵公曰昔此地に此鳥なし今始
て来るハ氣の南よりして北すればなり至る所あへし客曰何ぞや
まゝる邵公曰天下まさに乱れんとして宋朝衰へんと果して後に南遷
の変ありしとぞ今我朝ハ宗明君まし／＼人民堯舜の化を
楽しむ時なれバ諸事のはやら南するものなり是につけて
さらに毎年浪花の川座堤より清く流るゝのなかりし是ハ太平
なる人民皆安楽に家業に居て富栄もありハ年々に小
魚く出る海にも山にも谷の材木も今ハ斧斤入ずに絶まる所

くハ切かゝりしたるゆゑ鰐口ならびにこれに山谷くの玉川流を出て
此井ハ川より出て流くめくりや京の事をもてさへに四ツの湖水な
と四方へ廣くありて四方ともに小数十丁に及べりとぞ白髭明神
のある所も昔の堂塔にありしが今ハ湖水の底深く入りて見えず
竹生島の瑪瑙石の橋も今ハそのまゝ水底数丈の下にかくれたり是
湖水の底に玉あり淀流も入りて深く広くし水四方に溢れて
湖は広く成りて水面はるかなり淀川までも昔や
は水面広く成りて淀伏見の辺の堤ありむかし堤のもとにあ
まり並木の松今は堤のもとにありつ堤の内の田地よりハ川中の水
面はるかに高く七八十年以前より八七八尺の後に

てり伏見の町ハ金屋年経ても金ちえて總二十年くらひ
なきかるに年々町くの事まる入りて繁栄なりかに一年くに
ならく其の町家ハ店に盛なる由意に年に月くに栄えて
ふえく家取遂もり繁に中一年おまてハ地面もるく家居カへうて
植なりしとて中四年まるとき倦ろ所く地面を築きるに細に
するうしふと低く其くその違に同まふにかまちかく家
里也ウハ数十百年の後ハ町家も田畑と繁栄にあるべき事ぞ
ぶりる天地之かくのごとく変しそりけバ況や人世の事ハ遷らが
りるべき乃理うつあやしむにたらぬ

東遊記後編巻之五終

平野屋

西遊記後編嗣出

寛政九年丁巳正月

書肆

京都寺町通松原下ル
勝村治右衞門

大阪心齋橋通安土町
吉田善藏